

## 7. 日暮遺跡 第44次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、六甲山地より南流する生田川やその他の中小河川によって形成された沖積地の末端付近に位置する遺跡である。昭和61年度に市営日暮住宅建設に伴う調査によって発見され、この第1次調査では古墳時代の堅穴建物や平安時代の掘立柱建物、皇朝鏡を埋納した地鎮遺構などが確認されている。その後、これまでに43次にわたる発掘調査が実施され、主に弥生時代後期～中世にかけての遺構・遺物が確認されている。



fig.67 調査地位置図 1:2,500

## 2. 調査の概要

今回の調査は、第1次調査地の南側約40mの地点において、個人住宅建設に伴う工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を行った。

調査区は、掘削残土置き場を確保するため1～3区に3分割し、遺物包含層上面までを0.1バックホウ、以下を人力によって掘削した。

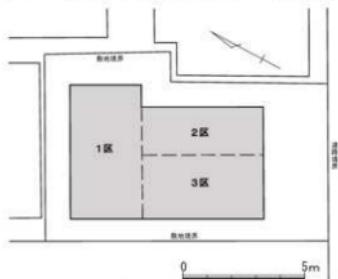


fig.68 調査区配置図

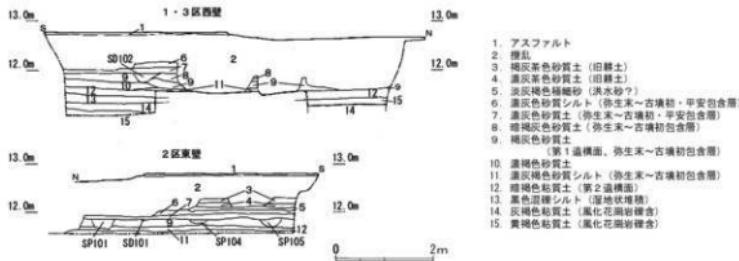


fig.69 土層断面図

### 基本層序

現地表面の標高はおよそ T.P. 12.8mを測る。従前の建物基礎による擾乱が著しいが、擾乱が浅い箇所では旧耕土がわずかに残存しており、その下層に弥生時代後期末～古墳時代初頭、および平安時代の遺物包含層（6～8層）が堆積する。第1遺構面となる旧耕土状の褐灰色砂質土（9層）は T.P. 11.8～11.9mを測り、層中に弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物を含んでいる。第2遺構面となる暗褐色粘質土（12層）は T.P. 11.6mを測り、調査区全面にわたってほぼ水平に堆積している。その下層で断面調査を行ったが遺構・遺物は確認されず、風化花崗岩礫を含む地山である黄褐色粘質土（15層）へと漸移的に堆積していく様子が確認された。

### 第1遺構面

褐灰色砂質土（9層）上面において、溝状遺構2条、土坑2基、ピット13基を検出した。

#### 溝状遺構

鋤溝と考えられるS D101と、不整形で規模の大きいSD102がある。

**SD102** 3区中央で検出した不整形の溝状遺構である。幅約 60～70cm、深さ 20cm を測る。埋土から弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器片が出土しており、南側底部付近からは庄内式併行期と考えられる甕1個体がほぼ完形で出土した。

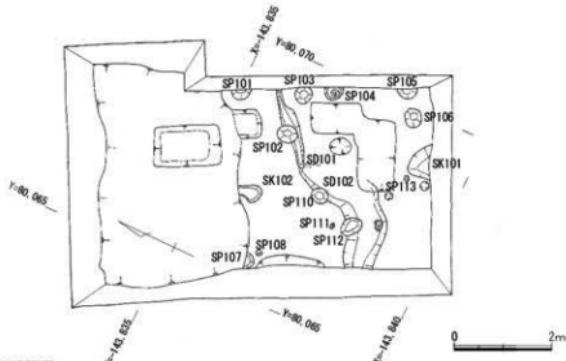


fig.70 第1遺構面平面図



fig.71 1区全景（東から）



fig.72 2区第1遺構面全景（南から）



fig.73 3区第1遺構面全景（南東から）



fig.74 3区SD102 遺物出土状況（南西から）

**土坑** いずれも深さ5～15cm程度で、土師器の細片が出土したのみである。

**ピット** いずれも直径15～45cm、深さ5～25cmである。S P104は柱穴とみられるが、土師器の細片が出土したのみで詳細な時期は不明である。

## 第2遺構面

暗褐色粘質土(12層)上面において、溝状遺構1基、土坑4基、ピット29基を検出した。

**溝状遺構** 幅20cm、深さ5cmの小規模なSD201を検出したのみである。

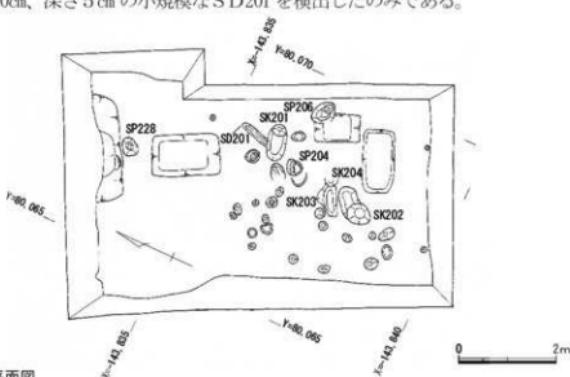


fig.75 第2遺構面平面図



fig.76 2区第2遺構面全景（南から）



fig.77 3区第2遺構面全景（南東から）

**土坑** SK201～204は、円形～楕円形で、長径45～70cm、深さ20cmを測る。埋土は灰褐色の中砂で、弥生時代後期末の土器片が出土している。SK202からは、弥生時代前期の可能性のある土器片がごく少量出土した。

**ピット** 直径20～25cm、深さ10cmの小規模なものが大半であるが、SP228・SP204・SP206は直径30～50cm、深さ30～45cmを測り、柱穴と考えられる。特にSP204は検出面から45cm掘り進め、底部には長径20cmの根石を据えている。

### 3.まとめ

今回の調査では、2面の遺構面を確認した。第1遺構面では、弥生時代後期末～古墳時代初頭、および平安時代の遺物が出土していることから、これら2時期の遺構が存在するものと考えられる。

しかし、遺物量は相対的に弥生時代後期末～古墳時代初頭が圧倒的に多く、また今回の調査地より南で行われた第25次調査における平安時代の遺構面がT.P.12.2～12.3mであることなどからみて、今回の調査地における平安時代以降の遺構面は後世の搅乱によって削平された可能性が高く、一部の掘り込みの深い遺構が第1遺構面で検出されたものと考えられる。

第2遺構面は、弥生時代後期末の可能性がある。調査面積等の制約から、建物等に復元することはできなかったものの、柱穴を複数確認しており、何らかの構築物が存在したものと考えられる。特にSP204は柱穴底部に根石を据えており、柱材を安定させるための工夫とみられる。類例は篠原遺跡第6次調査の堅穴建物SB04（庄内式併行期）などで確認されている。

日暮遺跡における弥生時代後期末～古墳時代前期の遺構は、東雲通1丁目（第3～5・20・38・43次調査）において堅穴建物が計十数棟確認されており、集落の中心的範囲と考えられるが、その南側では八雲通2丁目（第30次）や日暮通1丁目（第1次）で堅穴建物が確認された以外は、散在的な遺物の出土がほとんどで、時期を庄内式併行期にまで絞るとその数はさらに少なくなる。今回の調査地周辺も、第31次調査の成果から当該期の集落域が及んでいないことが予想されていた。

今後、八雲通1丁目や日暮通2丁目、吾妻通1・2丁目の調査が進めば、日暮遺跡における弥生時代後期末～古墳時代前期にかけての集落域の広がりを把握することが可能になってくるものと考えられ、今回の調査成果はそのうえで重要な知見が得られたといえる。

## 8. 日暮遺跡 第45次調査

### 1. はじめに

日暮遺跡は中央区筒井町・東雲通・八雲通・日暮通・吾妻通・脇浜町にかけて展開する、古墳時代～中世の集落跡である。遺跡が所在するのは六甲山系の南麓であり、旧生田川などの中小河川によって形成された扇状地の末端部にあたる。現在は海岸線から700mほど内陸に位置しているが、古代には国道2号線付近に海岸線があったとされ、海沿いに展開していた遺跡であると考えられている。

日暮遺跡では、昭和61年度に第1次調査が実施されて以降、現在までに40を超える調査次数を数える。今回の調査地の近隣では、第1次調査と平成19年度の第31次調査がおこなわれている。第1次調査では、古墳時代の堅穴建物、平安時代の掘立柱建物や地鎮遺構、中世の流路とそれを利用した近世の石組構などが見つかっている。また、平安時代の遺構からは綠釉陶器や皇朝銭が出土しており、官衙的な施設である可能性が指摘されている。第31次調査でも同様の調査成果が得られているが、古墳時代の遺構は検出されておらず、集落は南側には展開しないと考えられている。

今回の調査地は、これらの調査地点から南西方向にわずか数十mの距離に位置しており、各時代の集落の広がりが明らかになることが期待された。



fig.78 調査地位置図 1:2,500

## 2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴って実施した。調査対象範囲は、住宅建設部分の約 20 m<sup>2</sup>である。調査区は残土処理の関係から南北に2分割し、北半を1区、南半を2区として調査をおこなった。第1遺構上面までは重機掘削をおこない、それ以下については人力掘削によって作業を進めた。

### 基本層序

調査地の現地表面の標高は T.P. 13.1m 前後である。北から南に向かって緩やかに傾斜している。層序は上層より、盛土・擾乱層、褐灰色粗砂混じり細砂層(旧耕土)、灰黄褐色中砂層(洪水砂)、褐灰色細砂(旧耕土)、灰褐色細砂層(旧耕土)、黒褐色細砂層、暗褐色細砂層、褐色中砂混じり細砂層(地山)の順に堆積している。地山上面の標高は T.P. 11.8m 前後である。旧耕土層には遺物が少量含まれているが、黒褐色細砂層では上面でわずかに土器片が出土する程度で、それより下層では全く遺物は出土しない。

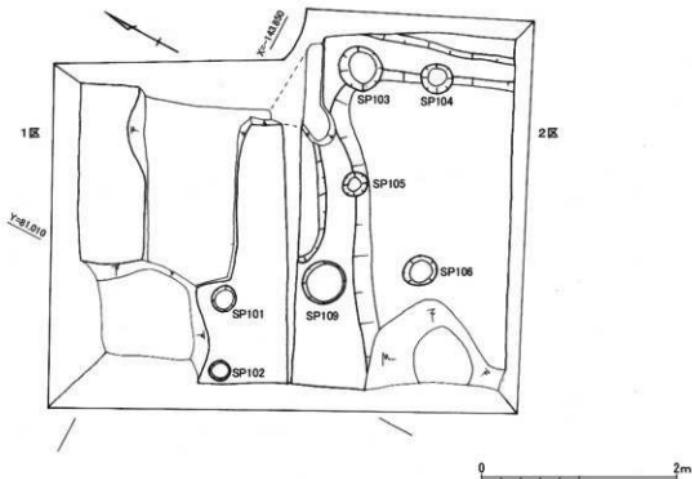


fig.79 第1遺構面平面図



fig.80 1区第1遺構面全景（北東から）



fig.81 2区第1遺構面全景（南西から）

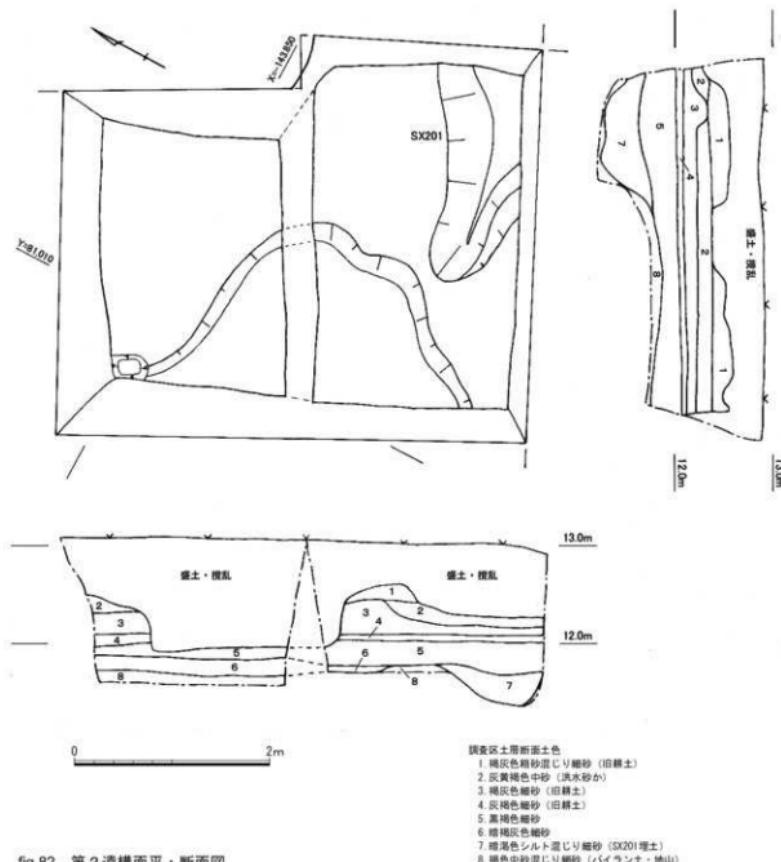


fig.82 第2遺構面平・断面図

### 第1遺構面

T.P. 12.3m付近の褐灰色細砂層（3層）上面で検出した中世の遺構面である。耕作に伴う遺構面であるとみられる。洪积砂とみられる灰黄褐色中砂層（2層）に覆われており、これによって一度に埋没したと考えられる。

**ピット** 一部に攪乱を受けているものの、調査区の南寄りを中心に複数のピットを検出した。2区では畦とみられる細長く延びる高まりを検出した。ピットの規模は、直径 20～45cm、深さ 5～50cm の範囲に收まり、埋土はいずれも單一層である。

S P103 と S P109 は規模や埋土が近似しており、同じような遺構であると考えられる。遺構からはあまり遺物が出土しておらず、土師器や須恵器の破片が少量含まれる程度である。詳細な時期は決定しがたいが、いずれも中世前半頃の遺構であると考えられる。



fig.83 2区第2遺構面全景（南西から）



fig.84 2区第2遺構面落ち込み（北から）

## 第2遺構面

褐色中砂混じり細砂層（8層）上面で検出した遺構面である。

**SX201** 調査区の南東端で落ち込み SX201 を検出した。幅は 2m 以上あり、深さは最大で 50cm を測る。埋土は単一層であり、ラミナ堆積などはみられない。出土遺物はなく遺構の時期は不明であるが、古墳時代以前であると考えられる。遺構の形状などから推測して、風倒木痕の可能性が高いと考えられる。

調査区の西側では、上層の黒褐色細砂層が厚く堆積しており、浅い落ち込み状の広がりを呈していた。

## 3.まとめ

今回の調査では 2 面の遺構面を検出した。

第 1 遺構面は中世の耕作に伴うと考えられる遺構面である。複数のピットや畦とみられる高まりを検出した。出土遺物が少なく、詳細な時期は決定しがたいが、概ね中世前半の遺構であると考えられる。

第 2 遺構面は古墳時代以前と考えられる遺構面である。風倒木痕と考えられる落ち込みを検出した。出土遺物は皆無である。第 31 次調査でも今回の調査と同様に、古墳時代以前と考えられる遺物が全く出土しない遺構面において、複数の風倒木痕が検出されている。同様の景観が調査地周辺に展開していたと考えられる。

第 1 次・第 31 次調査で見つかっている平安時代の集落については、今回の調査ではその時代の遺構は検出されなかった。調査面積が限られているため断定はできないが、この時期の集落は今回の調査地の方向には展開していない可能性が考えられる。

また、古墳時代の集落については、第 31 次調査と同様に今回の調査地でも遺構は見つからなかった。これにより、第 1 次調査で見つかった集落は南には展開しない可能性が高くなった。一方で、第 31 次調査の南で実施された第 44 次調査では、溝から庄内式並行期の甕が出土している。時期により集落の規模や範囲が微妙に変化していたことがうかがえる。周辺の調査が進展することで、より正確な集落の広がりが明らかになることが期待される。

## 9. 雲井遺跡 第37次調査

### 1. はじめに

雲井遺跡は、六甲山系から流れ出た河川により形成された複合扇状地の末端に近い標高10～20mの緩斜面地に立地している。現状では、南北約500m、東西約700mの範囲に広がっていると推定されており、現在の住居標示では、東は中央区旭通2丁目、西は中央区雲井通7丁目、北は中央区琴ノ緒町1丁目～5丁目、および二宮町2丁目～4丁目の南側にかけて所在している。

当遺跡周辺は、はやくから市街地化され、遺跡の存在は明らかではなかったが、昭和62年度の市街地再開発ビル建設事業に伴う発掘調査によって発見された。

これまでに36次の発掘調査が行われている。それらの調査成果により、縄文時代早期から中世にかけての複合遺跡であることが解明されている。

平成20年の第28次調査では、縄文時代早期・前期・後期の遺物が出土し、弥生時代中期、古墳時代、中世の遺構の広がりが確認されている。特に弥生時代中期では、堅穴建物群と貯蔵穴、玉作りに関連する遺物や武器型青銅品の石製鋳型などが発見されている。

### 2. 調査の概要

調査は、0.1パックホーにより碎石の除去、盛土・搅乱土の掘削作業を行った後、人力による遺物包含層の掘削、遺構検出、遺構掘削作業を実施した。掘削土は場外搬出せず、敷地内に仮置きすることとした。

東側を1区、西側を2区として反転し1区の調査終了後、2区の調査を行った。



## 基本層序

当該地は、西に二宮筋商店街に面したことから、全体に搅乱が多いものと考えられたが、1区(東側)の中央に大きな搅乱があったのみで、土層の残りは比較的良好なものであった。六甲山南麓の緩斜面上に立地していることから、北に高く南に傾斜する土層堆積である。大きな洪水の痕跡などは上層では見られなかったが、下層には、縄文土器を含む粗砂層が存在する。

遺構が多く見られた調査区北壁断面で基本層序の観察をすると、現地表面から約50cm下(T.P. 18.90m)までは盛土や整地層、旧耕土、旧床土が存在する。その直下に遺物包含層である8. 橙灰色砂質土、その下層の9. 濃灰褐色砂質土上面が第1遺構面(T.P. 18.85m)、10. 濃褐灰色砂質土、その下層11. 淡灰褐色シルト質極細砂と12. 濃灰褐色粘性砂質土の上面が第2遺構面(T.P. 18.70m)である。1区では、下層に13. 明褐色中砂～粗砂が存在し、その中からは縄文時代後期の土器が出土する。

## 第1遺構面

1区(東側)では、南東方向に緩やかに落ちる傾斜地形を検出した。2区では旧耕土下の橙灰色砂質土で比較的多くの飛鳥時代から中世にかけての須恵器や土師器が出土した。その下層、濃灰褐色砂質土の上面で第1遺構面(標高約18.85m～18.54m)を検出した。

検出遺構は、ピット5基、土坑6基、不明遺構3基を検出した。S P01・02の埋土は旧耕土や粗砂などが入るもので、この遺構面のものではなく、上層からの切り込みの可能性がある。

ピットS P04は明確な柱穴と考えられ、S P03・05も比較的しっかりとしたものであることから、当地点から北西方向に建物が存在する可能性がある。出土遺物から鎌倉時代のものと考えられる。

不明遺構 いずれも大きい窪み状のものであるが、S X02は検出面から50cmも掘り込まれている。しかしながら、埋土は自然堆積のようにも観察され、出土遺物もないことから風倒木などの自然現象による所産と考えられる。

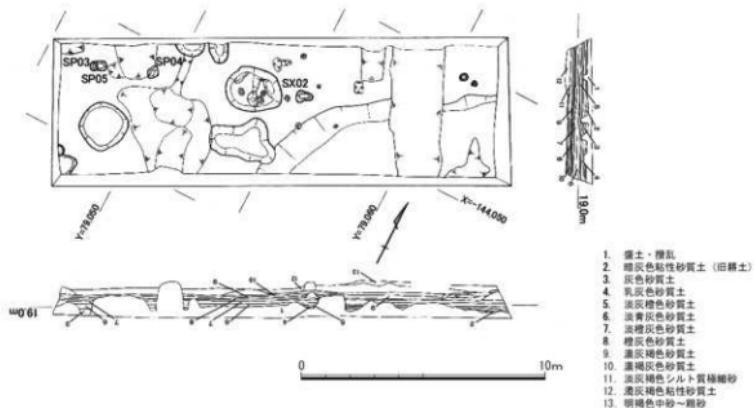


fig.86 第1遺構面平・断面図



fig.87 1区第1遺構面全景（東から）



fig.88 2区第1遺構面全景（西から）

## 第2遺構面

第1遺構面のベース面を掘削し、その下層である淡灰褐色シルト質極細砂と濁灰褐色粘性砂質土の上面で第2遺構面（標高約18.76m～18.42m）を検出した。

検出遺構は、比較的大きなものが多かったため、遺構名に土坑を表すSKの表記にしたが、断面観察などから柱穴となるものが多いことが判明した。

**SK205** 直径80cm、深さ32cmで内面中央には直径20cm、深さ6cmの柱の沈み込みが検出された。同様に、柱の沈み込み、あるいは断面観察により柱穴と考えられるものは、SK216・217・220・221・222であるが、建物としてのまとまりを確認することはできない。

**SK215・SK225** 円形のプランで直径が80～90cm、深さが35～55cmを測る。底面からの立ち上がりはほぼ垂直である。

**溝** SK219・221～224に沿って溝状の落ち込みが検出されている。溝として水の流れがあるようなものではなく、区画を設けるようなものと考えられる。その溝に沿ってSK219・221～224が構築されたようであるが、その用途については不明である。この溝状遺構の埋土からは、土錘1点と下層からの混入と考えられる石器（刃器）が1点出土した。

その他の遺構から出土したものは、いずれも時期を特定することが不可能である微細な土師器片が少量出土するのみであるが、SK215からは古墳時代末の須恵器片が出土していることから、第2遺構面の時期は古墳時代末期と考えられる。

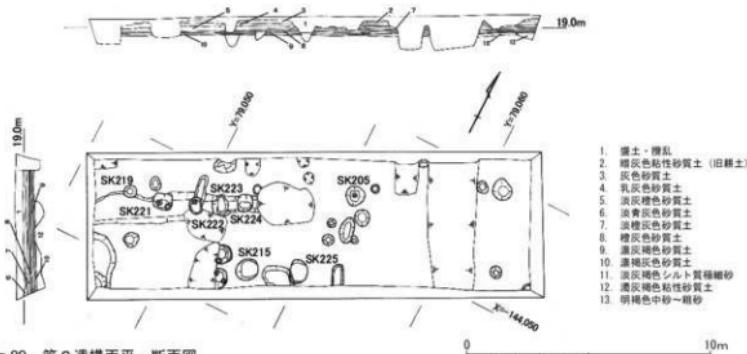


fig.89 第2遺構面平・断面図

### 3. まとめ

雲井遺跡の範囲としては、最も北に位置する地点での調査となった。雲井遺跡の北側には隣接して飛鳥時代の鍛冶工房が発見された二宮遺跡が広がっていることから、第1遺構面検出時に飛鳥時代から奈良時代にかけての遺物が出土することは、隣接してその時期の遺構の存在を窺わせるものである。

第1遺構面では、東側は緩い傾斜面であるため遺構は希薄であったが、2区の北東隅には鎌倉時代のしっかりとした柱穴が存在することから、当該地の北西方向に鎌倉時代の建物跡が存在する可能性がある。

第2遺構面も第1遺構面同様に西側に比べると東側の方が遺構は希薄である。出土遺物が少ないため時期の確定は難しい。しかしながら、遺構面検出中にも古墳時代の須恵器が多く出土することから、古墳時代末期を中心とした遺構面と考えられる。今回の調査区の中では建物の構成を見出すことができなかったが、遺構の密度から当該地から西側に集落の中心が存在する可能性がある。

下層については、西側には存在しない粗砂層が東側にのみ存在しており、小さな谷地形に洪水砂が堆積したものと考えられる。縄文時代後期の遺物を含むことから、縄文時代後期以降に発生した洪水砂と考えられる。それ以降も第1遺構面までこの洪水砂が堆積している地点は不安定であったようで、遺構が希薄なことも元の地形が影響していると考えられる。



fig.90 1区第2遺構面全景（東から）



fig.91 2区第2遺構面全景（西から）



fig.92 1区調査区東壁断面（西から）



fig.93 2区調査区北壁断面（南東から）

## 10. 雲井遺跡 第38次調査

### 1. はじめに

雲井遺跡は神戸市中央区琴ノ緒町・旭通・雲井通一帯に拡がる遺跡で、昭和62年に再開発ビル建設に伴う発掘調査によって発見された。これまでに、縄文時代早期から平安時代にかけての長期にわたる集落遺跡であることが明らかになっている。とりわけ弥生時代前期後半から中期にかけての集落跡と方形周溝墓群が場所を異にして確認されており、当時のムラと墓地がセットで判る貴重な例である。

古墳時代の集落は概ね阪急・JR線の高架より北側に位置し、これまで堅穴建物、掘立柱建物、溝等が見つかっている。当遺跡の北側に接する二官遺跡（飛鳥時代～奈良時代）やその北側に位置する生田町古墳群（古墳時代後期）と併せて考えてみると、当時の生活領域と土地利用の変遷が窺い知れる。

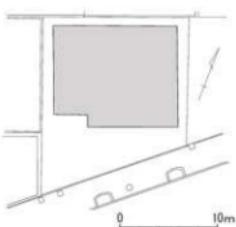


### 2. 調査の概要

建築工事によって遺跡に影響が及ぶ範囲内の発掘調査を実施した。調査に伴う掘削残土の仮置き場の確保のために、調査範囲を2分割し、調査順に北半分の調査区を1区、南半分の調査区を2区として調査を開始した。

#### 基本層位

当該地付近は六甲山南麓を流下する旧生田川によって形成された扇状地の緩斜面に位置し、標高16m前後を測る。周辺の現在の地形は、概ね北から南に傾斜している。

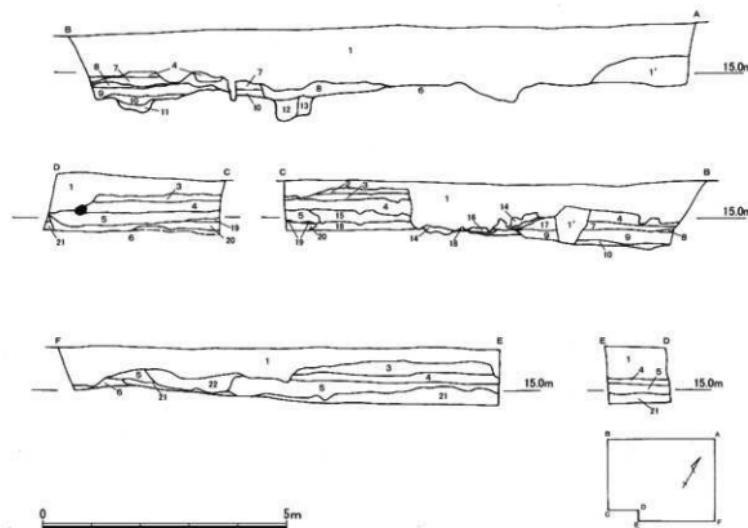


調査地は敷地北半分に鉄筋コンクリート造の建物が建っており、その基礎設置・解体撤去工事に伴う掘削によって、遺物包含層と遺構面が損壊されているものの、それ以外の部分は概ね良好な状態で保存されていた。

基本的な層位は以下の通りである。

1. 瓦礫・コンクリート・褐色土（盛土・搅乱土）
2. 灰色砂質土（旧耕作土）
3. 黄灰褐色砂質土（旧床土）
4. 灰褐色砂質土（古墳時代の土器を含む）
5. 暗褐色砂質土（弥生～古墳時代の土器を含む）
6. 淡褐色～黄褐色混練砂質土（土石流のトップ）

現況地表面から遺物包含層である褐色砂質土上面までは約1mである。



- |                            |                             |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. 瓦礫・コンクリート・褐色土（盛土・搅乱土）   | 12. 黄褐色砂質土混じり黒褐色シルト（ビット埋土）  |
| 1'. 褐色土（瓦礫混じり）             | 13. 黒褐色砂質土                  |
| 2. 灰色砂質土（旧耕作土）             | 14. 黄褐色粘土混じり褐色砂質土（SB01 埋土）  |
| 3. 黄灰褐色砂質土（旧床土）            | 15. 暗灰褐色砂質土（SB01 埋土）        |
| 4. 灰褐色砂質土（古墳時代の土器を含む）      | 16. 暗褐色粘性砂質土（SB01 床面）       |
| 5. 暗褐色砂質土（弥生～古墳時代の土器を含む）   | 17. 黄褐色粘土（カマド裏塗土）           |
| 6. 淡褐色～青褐色混練砂質土（土石流のトップ）   | 18. 淡褐色砂質土（よくしまる）           |
| 7. 淡灰褐色砂質土（撹土・埃多く含む）       | 19. 黄褐色粘土（層状に入り込む）          |
| 8. 褐色砂質土                   | 20. 灰褐色砂質土（古墳時代の土器含む・落ち込み状） |
| 9. 暗褐色砂質土（部分的に黄褐色粘土が帯状に入る） | 21. 褐色砂質土（少量の土器含む）          |
| 10. 褐色砂質土（度温じり）            | 22. 黄褐色極細砂混じり褐色細砂（溢流堆植物）    |
| 11. 黑褐色砂質土                 |                             |

fig.96 土層断面図

## 遺構

調査の結果、1区では西端部を除き、建物基礎の搅乱層を除去すると遺構検出面となり、焼土や炭化物が集中する部分が5・6カ所検出され、炭化材の集中する浅い落ち込み状遺構（SX01）を確認した。また、堅穴建物の可能性のある落ち込み状遺構（SX02）を確認した。

2区では旧耕作土、床土下に古墳時代の遺物を含む灰褐色砂質土が良好に残っていた。この層を除去して、暗褐色砂質土上面で遺構検出作業を行った結果、古墳時代後期の堅穴建物（SB01～03）を検出した。

**落ち込みSX01** 1区の中央で確認された遺構で、1.8m×80cmの深い窪みに灰や炭化材が溜まっていた。当初火災を受けた堅穴建物の一部ではないかと想定して調査を行ったが、底面の深さが一定でなく、炭化材出土の範囲も狭いため、窪みに炭化材や灰などを捨てた遺構であると判断した。

**落ち込みSX02** SX01は古墳時代の土器を含む暗褐色砂質土を切り込んでおり、この層を除去してゆくと北西方向に下がる地形となる。この層を除去した段階で、土石流の頂部である淡褐色～黄褐色混礫砂質土にあたり、その上面でピットを7基確認した。この部分は堅穴建物の一部である可能性もあるが、掘削中に明瞭な床面を確認することができなかった。

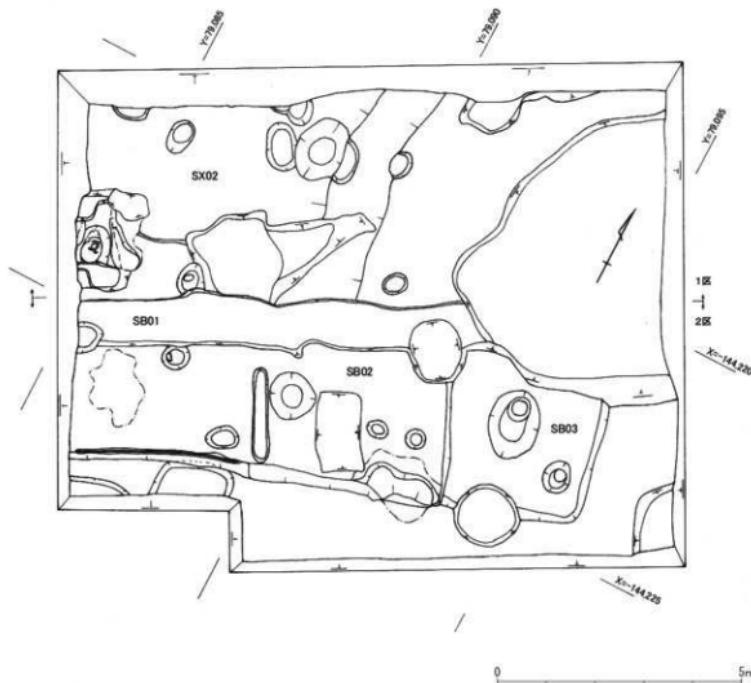


fig.97 遺構平面図

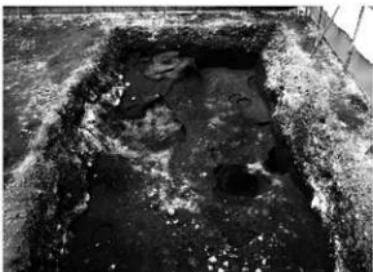


fig.98 1区全景（東から）



fig.99 2区全景（北西から）

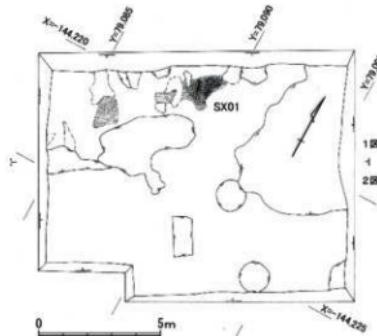


fig.100 焼土・炭化物出土範囲図



fig.101 1区 SX01 炭化材出土状況（南から）

**豎穴建物SB01** 1区のS X02 の覆土を除去してゆく段階で、焼土や炭化物の集中する部分を慎重に除去していく。このうち、1区西端部の焼土・炭化物の集中部分が豎穴建物に付属するカマドと判明した。この豎穴建物の大半は2区に收まることが判り、カマド部分は埋め戻さずに残しておき、2区掘削時に改めて調査を実施した。

調査の結果、SB01 は3棟が重なる豎穴建物の西端のもので、南北方向が4.5m程度の方形建物と考えられる。全体の約1/2が調査区外（西側）に出ている。北辺のカマドは長さ1.2m、幅1.2mで、焚口と煙道部分は後世の搅乱で損壊されている。燃焼部には、カマドに掛けた甕の底を支えるために据えられた長さ30cm程度の細長い川原石が立った状態で残され、周囲には割れた土師器甕の底部や炭・灰が堆積していた。また南側の辺には浅い周壁溝が掘削されている。床面でピットが4基検出されているが、どれが上屋を支える柱穴であるかは判断しにくい。ピットの一つからは土師器の小型甕が出土している。また薄い灰層が長さ1.6m、幅1.2m程度の不整形な状態で拡がり、その横からは須恵器壺一個体分が割れた状態で出土した。

**豎穴建物SB02** 3棟が重なる豎穴建物の中央のものである。南側を既存建物基礎による搅乱で損壊しており精確な形状・規模は不明であるが、1区で確認されたピットを建物の柱穴と考えるならば、6m×4m程度の長方形の建物と見なすことができる。床面には4基のピットと溝状の遺構が1条確認されている。また南東部には、直径20cm程度の焼土面が認められる。



fig.102 2区SB01(南から)

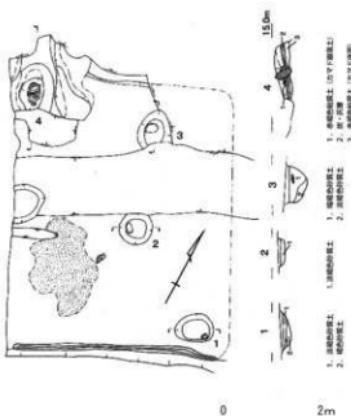


fig.103 SB01 平面図・ピット断面図

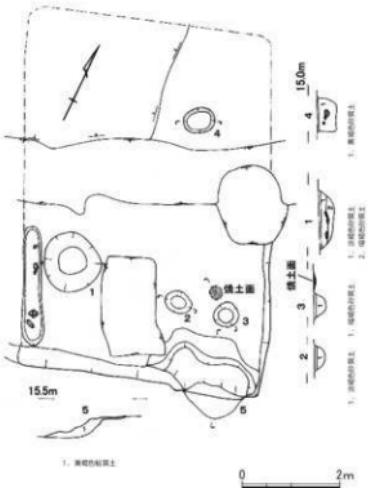


fig.104 SB02 平面図・ピット断面図

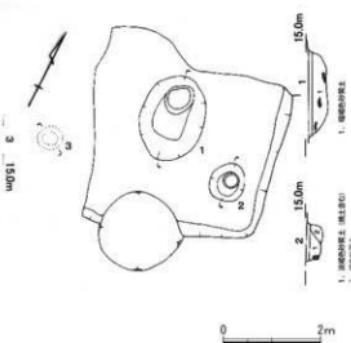


fig.105 SB03 平面図・ピット断面図

南東隅には黄褐色粘質土が階段状に厚く堆積している。この部分が出入り口となる可能性もあるが、隅の部分は上部構造物である両辺の垂木が低く下がってくる部分にあたり、壁立がある程度高くなければ出入口を設定するのは難しいと考えられる。

**竪穴建物SB03** 2区東端部で確認され、3棟の竪穴建物のうち、一番東側にある。北側を解体した建物基礎で損壊されており、南側は近代の井戸、西側はSB02によって削られているが、残存長辺  $2.7 \times 2.5\text{m}$  の方形建物と思われる。床面からは2カ所のピットが確認されたが、SB02床面で確認されたピットの一つをSB03のものと見なすこともできる。

**落ち込み状遺構** 2区の竪穴建物が掘り込む暗褐色砂質土は弥生～古墳時代の土器を含むため、建物の調査が完了した後に掘り下げたが、その際にSB01の南側で2基の落ち込み状の遺構を確認した。これらは暗褐色砂質土から切り込んでいる。

### 土石流堆積層（第2遺構面）

1・2区の遺物を含む土層をすべて除去すると、淡褐色～黄褐色混疊砂質土が検出される。この層は東側が高く北西側に下がる堆積状況を呈している。同層は数cm～20cm程度の淘汰されていない砂礫で構成され、河川氾濫に伴う土石流のトップ部分であると考えられる。古墳時代後期以前の堆積であることは判るが、精確な堆積時期は不明である。



fig.106 2区第2遺構面全景（北西から）

### 3.まとめ

今回の調査では後世の建物基礎と解体による掘削によって、北半分（1区）の遺物包含層と遺構面の大部は損壊されているものの、南半分（2区）は概ね良好に遺跡は保存されていた。調査の結果、古墳時代後期の堅穴建物3棟、炭化材の集中する浅い遺構、堅穴建物の可能性のある落ち込み状遺構等を確認した。

堅穴建物は、3棟が重複して東西方向に移動しながら造られている。重複関係はSB01<SB02>SB03になると考えられるが、SB01と03の先後関係は明確ではない。ただし、2つの住居の距離の近さから見て、同時存在の可能性は低いと思われる。いずれの建物も既存建物の基礎撤去時に一部または半分程度損壊しているため、正確な形状・規模が確認できなかった。

また、堅穴を掘削する際に、礫を多く含む土石流の堆積層に至ると掘削を止めていることから、掘削が困難な礫の堆積層をできるだけ避けながら造営していたことが窺える。このような条件のため、住居が造られる範囲はかなり限定され、位置を少しずつずらしながら建築したと推測される。

土石流による堆積層は東から北西側に下がる地形を呈しており、河川氾濫の激しさを示している。氾濫の精確な時期は不明である。

## 11. 楠・荒田町遺跡 第58次調査

### 1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、中央区馬場町・楠町・橘通・多聞通、兵庫区荒田町・西上橋通・西橘通・西多聞通・福原町にかけて広がる、縄文時代～中世の集落跡である。

遺跡の北東には、六甲山地から派生した丘陵が伸びており、宇治野山や大倉山などが連なっている。遺跡が位置するのはこの丘陵の先端部であり、北から南に向かって緩やかに傾斜した地形となっている。また、遺跡は旧湊川の左岸に位置しており、かつては遺跡のすぐ西側にその流路が存在した。大倉山を挟んで東側には宇治川が流れている。

楠・荒田町遺跡では、昭和53年度（1978）に市営地下鉄の建設に伴って第1次調査が実施されて以降、現在までに50次を超える調査がおこなわれており、今回の調査で58次を数える。過去の調査においては、縄文時代中期以降の各時代の遺構・遺物が確認されている。とくに、弥生時代前期末～中期を中心とする時期の遺構としては、堅穴建物や掘立柱建物、方形周溝墓や木棺墓、貯蔵穴などが多数検出されており、西摂地域の拠点となる集落が展開していたことが明らかとなっている。

また平安時代後期には、福原の地に平家の別業が造営され、いわゆる「福原遷都」がおこなわれたことが古記録よりうかがい知れるが、その中心は楠・荒田町遺跡から紙園遺跡にかけて



fig.107 調査地位置図 1:2,500

の地域であったことは確実となっている。神戸大学医学部付属病院構内でおこなわれた調査では、この時代の壕が見つかっている。この地点が平懶盛邸跡に比定されていることから、これに関連する遺構である可能性がある。

今回の調査地の東隣では、平成 17 年度（2005）に第 34 次調査がおこなわれており、鎌倉時代の遺構から土師器皿がまとまって出土している。また、今回の調査地から約 50m 西の地点では、平成 25 年度（2013）に第 56 次調査がおこなわれている。この調査では、東西方向の大溝が見つかっており、出土遺物より 15 世紀以降のものであることがわかっている。また、弥生時代中期の方形周溝墓が 2 基検出されている。

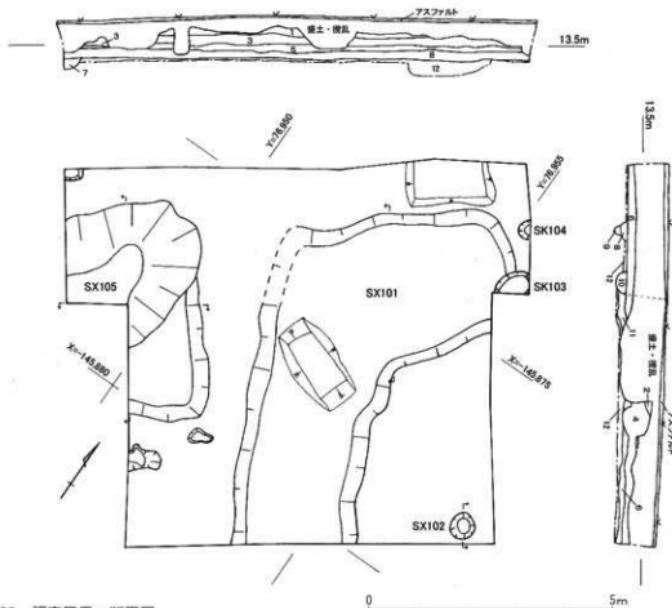


fig.108 調査区平・断面図



fig.109 調査前状況



fig.110 1 区北半全景（北西から）

## 2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴って実施した。調査対象範囲は住宅建設部分の約 63 m<sup>2</sup>である。調査区は、残土処理の関係から3区にわけて調査を進めた。

### 基本層序

調査地の現地表面は標高約 13.7 ~ 14.1mで、北から南に向かって傾斜している。アスファルトの下層には近現代の盛土があり、第二次世界大戦の空襲に伴うとみられる焼土溜りや、近代のレンガ構造物などがみられた。その下層には旧耕土層があり、残存状態の良いところでは4層を確認した。これらの土層には遺物はほとんど含まれていない。旧耕土層の下層、標高13.1m付近で弥生時代の遺構面を検出した。

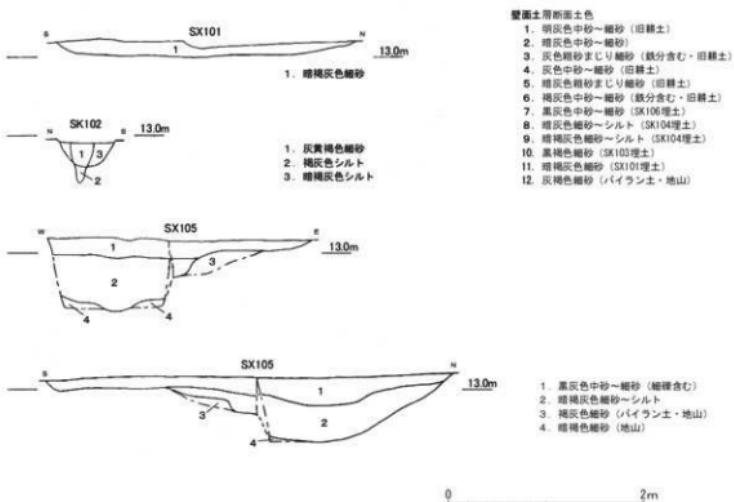


fig.111 遺構断面図



fig.112 1区南半全景（南東から）



fig.113 2区北半全景（東から）

### 遺構・遺物

**溝状遺構SX101** 幅 2.5～3 m、深さ 15cm ほどの浅い溝状の遺構である。調査区の北側から南東方向に折れ曲がるように延びている。埋土は單一層である。出土遺物は少なく、北東側では弥生土器片が出土しているが、南側ではほとんど遺物は出土していない。

**土坑SK102** 1 区の南東端で検出した土坑である。直径 60cm、深さ 45cm ほどの規模である。柱当たりを確認できることから、柱穴であることが推定される。おそらく、調査区外へ建物が展開すると考えられる。出土遺物はほとんどなく、遺構の時期は決定しがたい。

**落ち込みSX105** 2 区で検出した落ち込み状の遺構である。調査区内では幅 3 m、深さ 60 cm を検出した。全容は不明ながら、直径 4～5 m 程の規模はあるとみられる。遺構は播鉢状の窪みを呈している。遺物はそれほど多くはないが、弥生土器片が出土している。土器は上層から下層にかけて、偏りなく出土している。また、拳大の玉石が 2 点出土している。玉石はいずれも白色で、それぞれ梢円形と扁平形を呈している。

S X101 や S X105 から出土している弥生土器は、破片資料が中心であるため詳細な時期の決定はしがたいが、いずれも弥生時代中期後半頃であるとみられる。

### 3. まとめ

今回の調査は限られた面積で実施したものであるが、弥生時代中期後半頃の遺構を複数検出することができた。個々の遺構の性格については、全容が不明であるため明確ではないが、周辺の調査で弥生時代中期から後期にかけての遺構が見つかっており、この時期の集落が展開しているものと推測される。

また、周辺の調査では、弥生時代の遺構とともに中世の遺構も検出されているが、今回の調査では中世の遺構は検出されず、遺物もほとんど出土していない。今回の調査地は第 56 次調査で見つかった大溝の延長線上にあたっているが、大溝の続きを検出されなかった。隣接する第 34 次調査でもこの大溝は検出されていないことから、大溝が途中で屈曲しているか、途切れている可能性が高くなかった。

今後、周辺の調査が進展することで、弥生時代及び中世の集落の展開が明らかになることが期待される。



fig.114 2 区南半全景（南東から）



fig.115 3 区全景（東から）

## 12. 兵庫津遺跡 第62次C調査

### 1. はじめに

兵庫津遺跡は、弥生時代から近代までの複合遺跡であり、六甲山塊の南西側に広がる扇状地の複合した海岸平野の海浜部に立地する。標高は、現地表面が約1.7～1.9mであり、江戸時代の遺構面は、約0.6～1.0mほど堆積している近現代の盛土直下に広がる。遺跡の範囲は、砂嘴に沿う形で三日月状に占地し、北は佐比江町付近から南は和田神社の約2km、東は海浜部から西は兵庫駅南側付近の約1kmの間に広がる。

### 2. 調査の概要

今回の調査は、中央卸売市場本場跡地の大型商業施設建設に伴う発掘調査である。平成25・26年度には、第62次A・B調査として約25,000m<sup>2</sup>が調査されており、今回の調査地点は、第62次B調査のX・Y区と重なる区域である。この区域は、江戸時代の町屋が連綿と続く閑屋町と新町にあたり、建物や街路、井戸などの町屋を構成する様々な遺構が検出されている。今回は、商業施設の設計変更によって第62次B調査時より下層の遺構面が損壊される部分が生じたため、その範囲を対象に発掘調査を実施した。

第62次B調査後、遺構面上はブルーシートで保護しているため、発掘調査対象となる基礎杭が打ち込まれる予定の周囲をブルーシートまで重機で除去したのち、ブルーシート直下の遺構面から人力で掘削し、調査を行った。



## 基本層序

埋め戻した土(以下、客土とする)の地表面が標高約1.5~1.6mで、遺構面標高は、場所によって高低差があるものの、標高約0.3~−0.2mになる。遺構面は、調査地点の北側と東南側で良好に残存し、調査地点の西側と中央付近は擾乱によって大きく削平されていた。なお、狭小な調査面積のため、各杭間で遺構面相互の対応関係を把握しきれていない部分もあるが、概ね2~6面の遺構面を検出している。

層序は、客土を除去すると、町屋床土と土間が部分的に残存していた。この遺構面の下層には、暗灰色中砂～粗砂の整地層が2~5cm程度堆積し、その下に暗褐色粗砂の遺物包含層が10cm前後堆積しているが、基本的にはこの整地層と遺物包含層が2~3重程度堆積している。以下、各調査区の調査成果を述べる。(調査区の名称は「杭○」とする。)

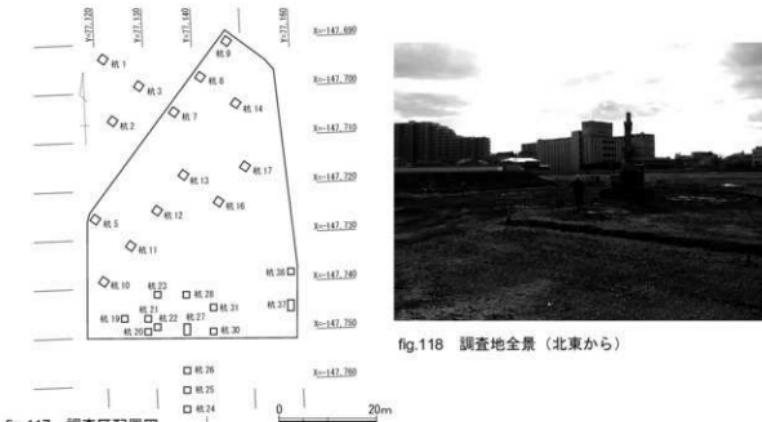


fig.118 調査地全景（北東から）

fig.117 調査区配置図

**杭1** 客土除去後(T.P.0m)、暗灰褐色細砂～粗砂の町屋整地層を確認するものの、遺構は存在しなかった。

**杭2** 客土除去後(T.P.-0.15m)、灰黄褐色細砂～粗砂の町屋床土と考えられる遺構面を検出した。その遺構面から落ち込む土層を壁断面で確認した。遺構の可能性もあるが、湧水が激しく、確認できなかった。

**杭3** 客土除去後(T.P.0m)、町屋整地層と考えられる土層があり、その下層から灰黄褐色細砂～粗砂の町屋床土と考えられる遺構面を確認した。備前窯産擂鉢、瓦などが出土している。

**杭5** 客土除去後(T.P.-0.4m)、黄白色シルトのブロックが混入する町屋整地層を確認するものの、湧水が激しく面的な調査が不可能であった。壁断面の観察から、町屋と考えられる土層が存在する。龍泉窯産瓈花皿、備前窯産擂鉢、焙烙、土師器皿、平瓦などが出土している。

**杭7** 客土除去後(T.P.-0.2m)、灰黄褐色極細砂の町屋床土を確認したが、遺構は存在しなかった。陶器器碗(fig.147-3, 4)、土師器皿・灯明皿が出土している。

**杭8** 客土除去後(T.P.0.1m)、町屋土間と考えられる黄白色シルト層を部分的に確認した。さらに、厚さ10cmの整地層下層に炭化物の拡がりを確認した。炭化物を掘削すると、土坑(SK201)の一部と町屋土間を検出した。土師器、焙烙、玉型土錐、平瓦が出土している。

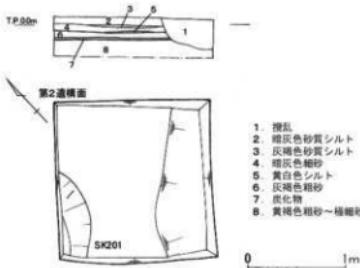


fig.119 杭8 平・断面図

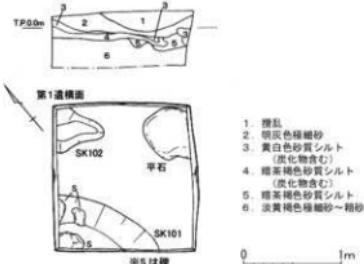


fig.120 杭9 平・断面図



fig.121 杭8 全景（南西から）



fig.122 杭9 全景（北東から）

**杭9** 客土除去後 (T.P. 0.1 ~ 0.2m)、炭化物の混入する黄白色砂質シルト層の広がりを確認した。町屋土間にあたると考えられる。遺構面からは、土坑2基と一辺 50cm 程の平石を検出した。この平石は、何らかの台石とみられ、その傍らから漳州窯産青花皿 (fig. 147-5) と土師器皿3点 (fig. 147-10, 11) が出土した。SK101は、楕円形の土坑と考えられ、深さ約30cmであった。中から20cm程の礫が出土した。遺構面からは、土師器 (fig. 147-6 ~ 9)、焰烙、軒丸瓦、平瓦、銅製文鎮が出土している。

**杭10** 客土除去後 (T.P. -0.4m) は、褐色粗砂の遺物包含層が一部残存していたものの、大半が攪乱によって破壊を受けており、遺構・遺物も確認されなかった。

**杭11** 客土除去後 (T.P. -0.7m) は、厚さ 40cm 以上の礫層が堆積していたが、遺構・遺物は確認されなかった。

**杭12** 客土除去後 (T.P. -0.8m) は、灰白色細砂、淡褐黄色粗砂が堆積していたが、遺構・遺物は確認されなかった。

**杭13** 客土除去後 (T.P. -0.1m)、灰黄褐色細砂～極粗砂層の町屋床土と考えられる土層を確認したものの、町屋に伴う遺構は確認されなかった。陶器・土師器が出土している。

**杭14** 客土除去後 (T.P. 0 ~ 0.1m)、調査区南半分の位置に直径 1.3m 以上の円形土坑を検出した。深さ 60cm で、土坑内には上部の破損した備前窯水屋甕 (fig. 147-12) が据えられていた。甕の検出面では、一辺 50cm 程の切石 2点が長辺を甕に合わせて据えられていたが、甕の転倒防止用と考えられる。甕内部には、暗灰色極細砂が堆積し、礫が混入していた。土坑内からは、

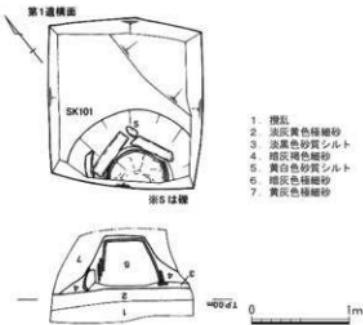


fig.123 杭14 平・断面図

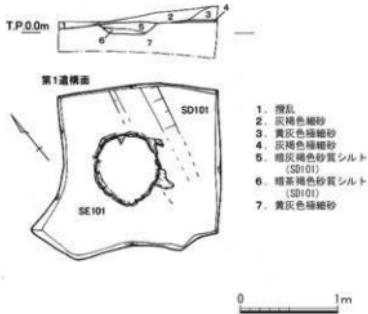


fig.124 杭16 平・断面図



fig.125 杭14 SK101 (南東から)



fig.126 杭16 SE101 (南東から)

龍泉窯産青磁碗、鳥食、雁振瓦の可能性がある瓦、軒丸瓦、平瓦、轍羽口が出土している。

杭16 客土除去後 (T.P. -0.3 ~ -0.5m)、溝1条と井戸1基を検出した。井戸SE101は、幅7~17cmの板材を組み合わせた桶の井戸で、上部は礫で組まれていたと考えられる。溝の検出面で確認された30cm程度の礫は、石積の井戸の残骸とみられる。溝SD101は、幅60cm、深さ10cm程度で南北に走る。磁器猪口 (fig. 147-13)、土師器、管型土錐、平瓦などが出土している。

杭17 客土除去後 (T.P. 0m)、町屋となる遺構面を2面検出した。第1遺構面では、土坑2基、ピット1基を確認した。土坑SK101は、深さ20cm程度で、炭化材と熔融、平瓦、丸瓦などが出土している。土坑SK102は、深さ20cm程度で、残存部分からみると円形になる。

第2遺構面は、灰褐色砂質シルトの整地層下にある。ピット1基と土坑1基を検出した。ピットSP201からは、つり紐組の丸瓦が出土している。土坑SK201の大部分は調査区外になる。土坑の最深部は30cm程度であり、土師器、景德鎮窯青花碗、水波文軒平瓦、軒丸瓦、つり紐組の丸瓦、磚が出土している。

杭19 客土除去後 (T.P. -0.4m) は、礫層と灰白色粗砂が互層堆積しているが、遺構・遺物は確認されなかった。

杭20 客土除去後 (T.P. -0.3m)、砂の堆積が続く。T.P. -0.6mで検出した褐灰色粗砂層上が遺構面を形成するように見受けられるが、遺構・遺物は確認されなかった。

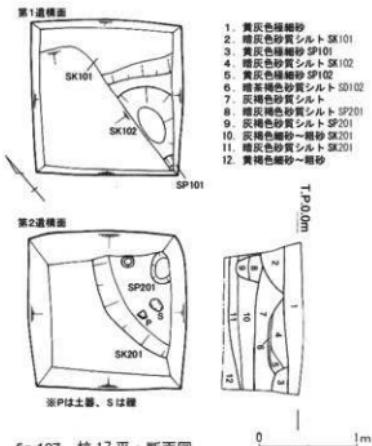


fig.127 桁 17 平・断面図

杭 21 客土除去後 (T.P.-0.5m) は、暗灰黄色細砂～粗砂の上面が比較的安定する砂面であるが、遺物・遺構は確認されなかった。この層以下では、砂礫層の堆積が続く。

杭 22 客土除去後 (T.P.-0.1m) は、土坑 1基とピット 1基を検出した。土坑 SK101 は、長径約 1.0m、深さ 15cm で東側に続く。埋土は、暗黄灰色粘質土と黄色粘質シルトであり、その下層に砂が堆積し、境目から礫と瓦片が出土した。土坑底面には、厚さ 1.5cm の炭が堆積している。ピット S P101 は、長径 20cm、深さ 10cm で、埋土ハ黄色シルト、遺物は出土していない。なお、T.P.-0.3m で褐色細砂層を検出したが、この層上で一辺 20cm ほどの石が 1 点出土した。礫石の可能性もあるが、周囲の状況が不明なため、遺構面としての断定はできない。

杭 23 客土除去後 (T.P.-0.3m) は、褐色粗砂と暗褐色粗砂の遺物包含層が堆積していた。

第 1 遺構面は、暗褐色粗砂層で検出した。検出した遺構は、ピット 1 基である。ピット S P101 は、長径 20cm、深さ 10cm である。遺構面上からは、江戸時代前期の土師器皿が出土している。この遺構面より下は、褐色粗砂層が続く。

杭 24～26 客土除去後 (T.P. 0～0.1m)、町屋の整地層と考えられる土層を確認するものの、遺構は確認できなかった。杭 25 からは焰烙 (fig. 147-14) と管型土錐など、杭 26 からは瓦質鍋 (fig. 147-15)、朝鮮王朝壺 (fig. 147-16)、中国産の可能性がある青花皿、瀬戸・美濃産菊皿 (fig. 147-17, 18) と天目碗、焰烙と灯明皿 (fig. 147-19)、丸型土錐、管型土錐、コビキ B 調整の丸瓦などが出土している。

杭 27 客土除去後 (T.P. 0.1～0.2m) は、第 62 次 B 調査で検出された町屋床土が調査区南側に残存し、長径 80cm、深さ 50cm の土坑 1 基と南北方向に並列して据えられた竈 2 基を検出した。竈 1 からは備前窯甕、土師器皿 (fig. 147-23)、平瓦が出土している。竈 2 からは備前窯甕、



fig.128 桁 17 第2遺構面全景（北西から）

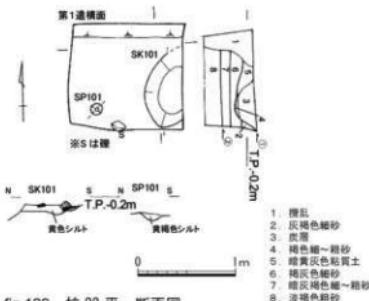


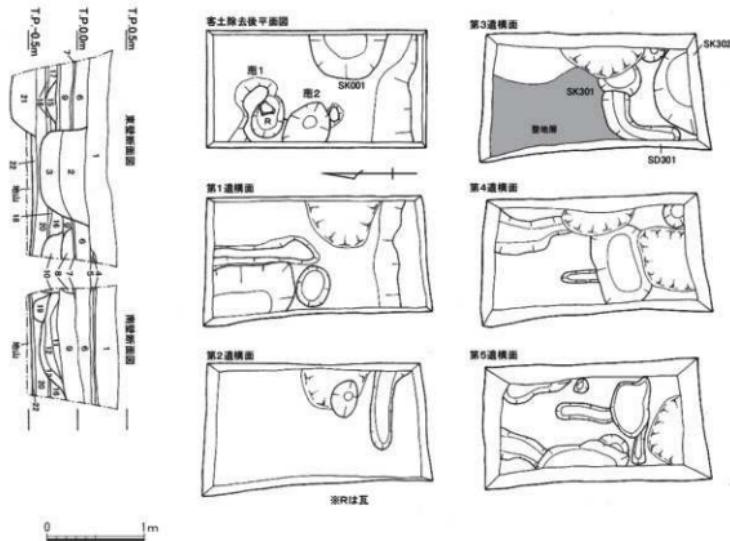
fig.129 桁 22 平・断面図

土師器皿、土錐、平瓦が出土している。また、この遺構面からは、火打石や鉄滓、中国産の可能性がある青磁菊皿、土錐、平瓦などが出土している。

第1遺構面は、町屋床土直下の整地層（第5層）で、土坑2基を検出した。調査区中央から北側では、町屋床土に由来する黄色粘土が南北方向の筋状に残存する。遺構面からは、中国産の可能性がある青磁菊皿・白磁菊皿、景德鎮窯産青花碗が出土し、遺物包含層中からは、土師質脚付鉢が出土している。

第2遺構面は、黒褐色粗砂の整地層（第7層）で、土坑1基、溝1条を検出した。備前窯甕、土師器皿、平瓦などが出土している。第2遺構面遺物包含層中からは、景德鎮窯産白磁端反皿、備前窯播鉢（fig. 147-24）、土師器皿（fig. 147-22）、平瓦などが出土している。

第3遺構面は、1cm大的礫を含む茶褐色粗砂の遺物包含層上面（第9層）で、土坑2基、ピット1基、溝1条を検出した。溝SD301から土師器皿（fig. 147-20, 21）、土坑SK301から景德鎮窯産白磁端反皿と朝鮮王朝陶磁の壺、土坑SK302底面から直径2mmほどの穿孔痕のあるヒトの頭蓋骨と中国産の可能性がある青花碗が出土した。また、調査区北側には、東側に黄褐色粗砂、西側に暗灰褐色粗砂が堆積しており、西側が整地層にあたる可能性がある。



- |                            |                       |
|----------------------------|-----------------------|
| 1 寄土                       | 12 土坑埋土／黄灰色粘土         |
| 2 土坑埋土／にぶい暗褐色粗砂            | 13 土坑埋土／赤褐色粗砂         |
| 3 土坑埋土／茶褐色ブロックを含むにぶい暗褐色粗砂  | 14 整地層／黒色粗砂           |
| 4 町屋床面／黄色粘土質中砂／寄土剥ぎ取り後     | 15 土坑埋土／暗灰褐色粗砂        |
| 5 整地層／灰色中砂／第1遺構面           | 16 包含層／1cm大的礫を含む赤褐色粗砂 |
| 6 包含層／にぶい暗褐色粗砂／1cm大的礫が主体   | 17 包含層／白褐色粗砂          |
| 7 整地層／黒褐色粗砂／第2遺構面          | 18 整地層／暗灰褐色粗砂／第4遺構面   |
| 8 土坑埋土／褐色粗砂                | 19 土坑埋土／暗灰褐色粗砂        |
| 9 包含層／1cm大的礫を含む茶褐色粗砂／第3遺構面 | 20 包含層／自然堆積層／黄褐色粗砂    |
| 10 土坑埋土／暗褐色粗砂              | 21 土坑埋土／薄灰褐色粗砂        |
| 11 土坑埋土／にぶい黒茶色粗砂           | 22 整地層か／黒褐色粗砂／第5遺構面   |

fig.130 杭27 平・断面図



fig.131 桁27第3遺構面全景（北から）



fig.132 桁27第5遺構面全景（北から）

第4遺構面は、暗灰色粗砂の整地層（第18層）で、土坑1基、ピット1基、溝2条を検出した。遺構面からは、土師器皿が出土している。なお、第14層でも整地層とみられる面を確認した。

第5遺構面は、黒褐色粗砂の整地層（第22層）で、土坑4基、ピット1基、溝3条を検出した。この遺構面より下は、褐色粗砂層が続く。いずれの遺構面も17世紀前半代に収まる。

杭28 客土除去後（T.P. 0.15～0.25m）は、調査区東側に暗灰色粗砂層、西側に黄褐色粗砂層が堆積しており、東側は整地層か町屋土間にあたる可能性がある。遺構は、長径60cm以上の土坑SK001を1基検出した。唐津窯皿、土師器、土製面子、コビキB調整の丸瓦が出土している。この面以下で検出した遺構面は6面である。

第1遺構面は、茶褐色混じり青灰色粗砂の整地層（第10層）で、土坑2基、ピット1基を検出した。ピットの埋土には、窯土が含まれていた。調査区北西隅にも窯土が広がるが、遺構の輪郭は不明瞭であった。北西隅の窯土上から土師器皿（fig.147-25）、遺構面から景德鎮窯産白磁端反皿（fig.147-30）、中国産の可能性がある青花皿、瀬戸黄釉皿（fig.147-29）、灯明皿（fig.147-28）、土師器皿（fig.147-26, 27）が出土している。

第2遺構面は、茶褐色粗砂の遺物包含層（第11層）で、ピット3基を検出した。

第3遺構面は、にぶい白褐色粗砂の遺物包含層（第13層）で、土坑1基、ピット2基を検出した。土坑SK301は、長径約40cmで、遺構内から3点の礫が出土した。

第4遺構面は、にぶい白褐色粗砂の遺物包含層（第15層）で、土坑1基を検出した。土坑SK401は、長径30cmで、遺構内から備前窯播鉢（fig.147-31）が出土した。

第5遺構面は、薄灰白色粗砂の整地層（第16層）で、土坑2基、ピット3基を検出した。ピットSP501は、長径約20cmで、遺構内から玉型土錐が1点出土した。包含層中からは、鍛造鉄片、土師器皿が出土している。

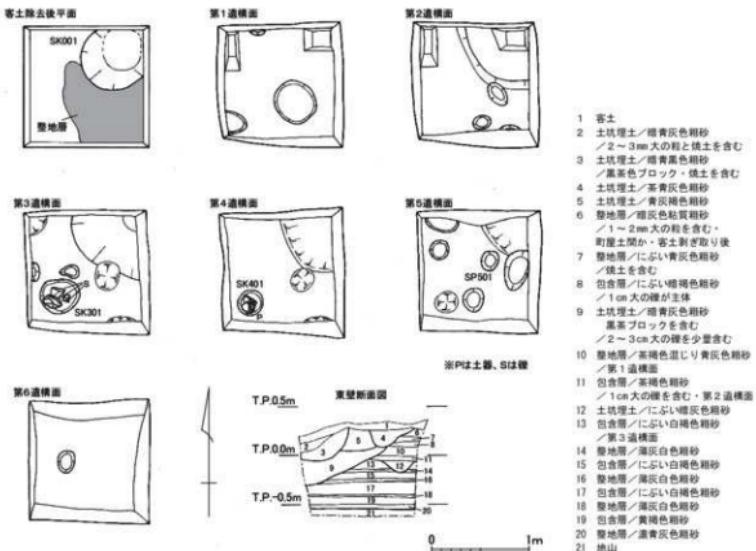


fig.133 桁 28 平・断面図



fig.134 桁 28 第4遺構面全景（北から）



fig.135 桁 28 第5遺構面全景（北から）

第6遺構面は、濃青灰色粗砂の整地層（第20層）で、ピット1基を検出した。この遺構面より下は、褐色粗砂層がつくづく。検出した遺構面の時期は、17世紀前半代の中で収まる。

**杭30** 客土除去後（T.P. 0.1～0.15m）は、調査区南側に町屋床土と整地層が残存していた。整地層上には、礎石1点と土坑1基を検出した。土坑SK001は、長径70cm以上、深さ70cmほどあり、底面から平石が1点出土している。この面より下層で検出した遺構面は6面である。

第1遺構面は、黒色粘質中砂の整地層（第10層）で、土坑1基、ピット4基を検出した。ピットS P101の上面から平瓦片が1点出土している。遺構面からは、漳州窯産青花盤、景德鎮窯産青花皿、龍泉窯産青磁棱花皿、備前窯捕鉢、灯明皿、鍛造鉄片、スレート、平瓦が出土している。

第2遺構面は、黒色粗砂の整地層（第17層）で、調査区東側に黄褐色粗砂、西側に灰色粗

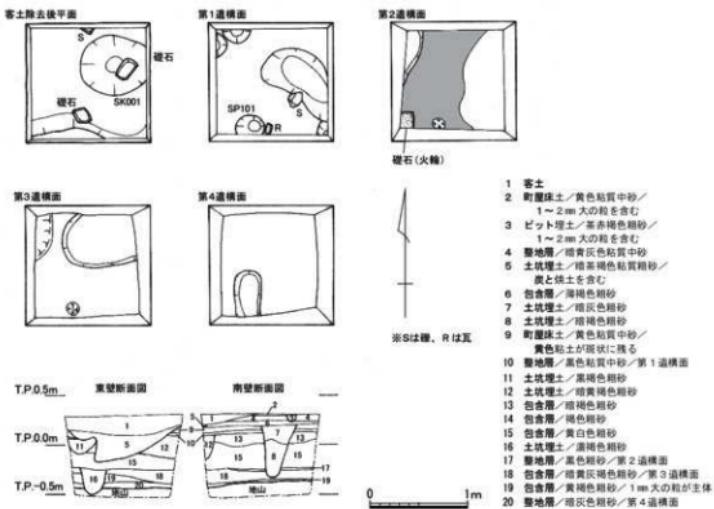


fig.136 杭30 平・断面図



fig.137 杭30 客土掘削後全景（北から）

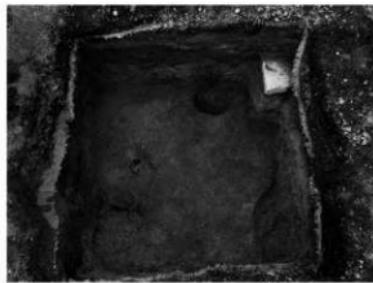


fig.138 杭30 第2造横面全景（北から）

砂が堆積し、西側が整地層にある。調査区北西では、長径 50cm 以上の土坑が溝とみられる遺構がある。調査区南西隅では、五輪塔の火輪が裏返され、礎石に転用されていた。遺構面からは、焰烙が出土している。

第3造横面は、暗黃灰褐色粗砂の遺物包含層（第18層）で、土坑1基を検出した。

第4造横面は、暗灰色粗砂の整地層（第20層）で、土坑が溝とみられる遺構を1基検出した。この遺構面より下は、褐色粗砂層が続く。遺構面の時期は、17世紀前半代の中で収まる。

杭31 客土除去後（T.P. 0.1 ~ 0.3m）は、調査区南東側と北側に灰色中砂の整地層あるいは土間があり、その灰色中砂層上に直径 20cm 前後の石が集積し、間からは瓦片が出土している。調査区南西側には、溝1条と長辺約 30cm の礎石が1点出土している。この面より下層で検出した遺構面は3面である。

第1造横面は、黒色粘質中砂の整地層（第5層）で、土坑あるいは溝を1基検出した。遺構

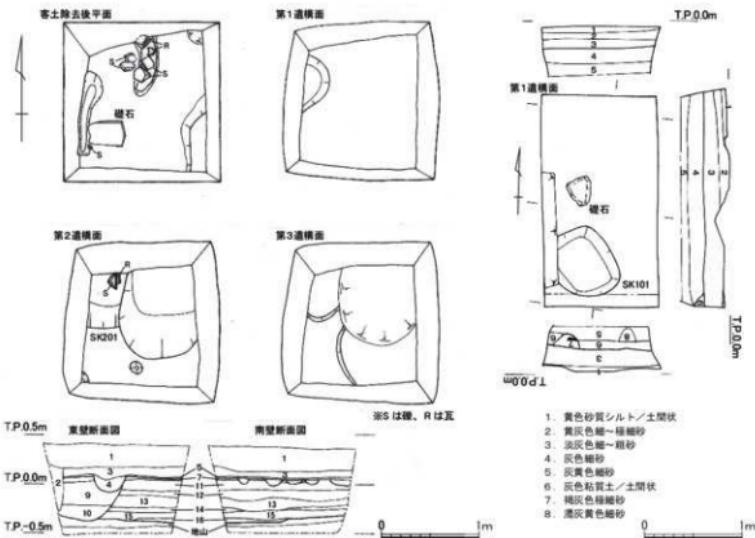
面からは、朝鮮王朝陶磁の壺 (fig. 147-32)、瀬戸・美濃窯産丸皿 (fig. 147-33)、備前窯播鉢、灯明皿、コビキA調整の丸瓦が出土している。

第2遺構面は、暗灰色粗砂で町屋土間か整地層（第7層）にあたるとみられる。土坑2基、ピット2基を検出した。土坑SK201底面からは、疊の下から瓦片が出土している。遺物包含層からは、硯、刀子、唐津窯碗（外面に墨書）と皿（fig. 147-34）、焰烙、土器器皿（fig. 147-35）、平瓦などが出土している。

第3遺構面は、暗黃白色粗砂の整地層（第12層）で、調査区南西側に灰色粗砂、北西側と南東側に褐色粗砂が堆積しており、南西側が整地層にあたる。この遺構面より下は、褐色粗砂層が続く。遺構面からは、焰烙が出土している。遺構面の時期は、17世紀前半で收まる。

杭37 客土除去後（T.P.-0.1m）、調査区北側で黄白色粘土の土間状部分を持つ遺構面を検出したが、遺構・遺物は確認されなかった。黄白色粘土の下層にあたる黄灰色粗砂へ極細砂層の整地層上面で炭の広がりを確認したが遺構にはならなかった。この遺構面からは、中国産の可能性がある黒釉壺の胴部片、備前窯播鉢（fig. 147-39）、土器器皿（fig. 147-36）、土錘、コビキA調整の丸瓦、平瓦、銅片などが出土している。

この面以下は整地に伴う砂の堆積が続き、T.P.-0.3mの灰色細砂層上面で30cm大的礎石1基と、長辺80cm、短辺60cm、深さ15cmの土坑1基を確認した。また、南側壁で柱穴を1基確認した。



1. 客土
2. 埋灰
3. 町屋土間か整地層  
／褐色粗砂を含む暗青灰褐色粘質中砂
4. 土坑壁土／暗青灰褐色粗砂／焼土を含む
5. 整地層／黒褐色質中砂／第1遺構面
6. ピット埋土／暗青灰褐色粗砂
7. 町屋土間か整地層／暗灰色粗砂／第2遺構面
8. 土坑理土／暗灰褐色粗砂
9. 土坑理土／黄灰色粗砂
10. 土坑理土／暗灰褐色粗砂
11. 包含層／黄白色粗砂
12. 整地層／暗青灰褐色粗砂／第3遺構面
13. 包含層／暗黄色粗砂
14. 整地層／暗青灰褐色粗砂
15. 包含層／暗青灰褐色粗砂
16. 整地層／暗灰色粗砂

fig.139 杭31平・断面図

fig.140 杭37平・断面図



fig.141 桁31第2遺構面全景(南から)



fig.142 桁37全景(南から)

漳州窯産青花皿 (fig. 147-37) と、下層からは小形の瓦質羽釜 (fig. 147-38) が出土している。いずれの層位も17世紀前半代で収まる。

**杭38** 客土除去後 (T.P.-0.2m)、上層から受けている擾乱の影響もあり、北から南へ傾斜した遺構面となる。調査区北側には、第1遺構面の土間状部分の一部、中央はその下層の整地層、南側は整地層下の遺構面に伴う土間が現れた可能性がある。この遺構面で検出した東壁際の土坑底から三つ巴文軒丸瓦が出土している。

第1遺構面の北側に広がる土間状部分は、全体の様子が明らかでない。土間状の貼土を除去した整地層では、北壁際で土坑2基を検出した。土坑SK101の埋土には漆喰のブロックを含み、上部の土間状部分の堆積に似る。遺構内からは、土師器とコピキB調整の丸瓦が出土している。土坑SK102も調査区外に続き、全体の規模は不明である。いずれも深さ20cmほどである。整地層中からは、漳州窯産の青花丸皿 (fig. 147-40)、灯明皿 (fig. 147-49)、瓦片など、北側の土間下層中からは、備前窯鉢 (fig. 147-42)、瀬戸・美濃産丸皿 (fig. 147-41) が出土している。17世紀前半代の遺構面とみられる。

第2遺構面は、南側に土間状部分を持ち (T.P.-0.3m)、土間の北側で土坑3基、その北側で集石遺構を検出した。土坑SK201は、長辺1.0m、短辺60cmの浅い落ち込みで、埋土に粘土、炭が混じる。調査区南東隅に被熱痕のある石があり、竈の基底部と考えられる。上層から朝鮮王朝の可能性がある磁器碗 (fig. 147-43)、陶器、灯明皿 (fig. 147-47, 50)、土師器皿 (fig. 147-48)、瓦、下層から備前窯鉢 (fig. 147-44) と徳利 (fig. 147-45)、土師器皿 (fig. 147-46) などが出土している。

土坑SK202も連続する竈口であった可能性がある。土坑SK203は、一辺約50cmの隅丸方形の平面形で灰色細砂を埋土とする。遺物はSK202とSK203から土師器、平瓦が出土した。土坑の北側で検出した集石は、東西40cm、南北30cmの範囲に直径1cmの小礫が敷かれたものである。何らかの基底部の可能性があるが明らかでない。客土を除去した段階の検出状況から、竈とした落ち込みなどは、整地層中でも判然としなかった上層の遺構である可能性も残る。土間の粘土中から漳州窯産青花碗が出土している。

第3遺構面は、T.P.-0.4mの灰黄色細～粗砂の上面に形成される。土坑2基、柱穴3基を検出した。土坑SK301は北側に続き、長辺50cmほどの楕円形を呈するものと考えられ、柱穴の可能性もある。底から20cm 大の礫が出土している。土坑SK302は、直径1.0m以上で深さ約30cmである。柱穴SP301～303は、直径30cmほどで、深さ10～15cmである。景德鎮窯

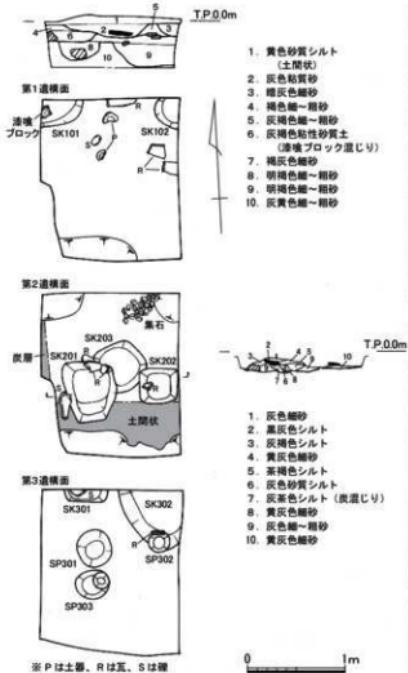


fig.143 杭38 平・断面図

産青花碗、土師器、瓦などが出土している。

### 3.まとめ

今回の調査は、狭小な範囲であったため、面的な広がりを追うことは難しかったが、第62次B調査の成果をほぼ追認し、さらに下層の様相を大まかながら把握することができた。

調査位置によっては、大きな搅乱等を受けていたが、下層遺構が残存している調査区も存在し、兵庫城下の町屋の様相を断片的にではあるがその情報を得ることができた。町屋の遺構面は、おおむね2~6面あり、時期的には17世紀前半代におさまることから、第62次B調査の時期区分に当てはめると、第II期前半に相当するとみられる。町屋内からは、中国・朝鮮半島産の輸入陶磁器も少くない量が出土しており、江戸時代前期の兵庫津遺跡に輸入陶磁器が流通していた様を知る上で、調査研究に資するデータを提供することができたといえるだろう。ただ、隣接する第62次B調査の基本層序断面(No.4・5・13・14)と今回検出した第II期といわれる遺構面の検出標高が双方で約0.5~0.8mほどの差があり、遺構面の標高の乖離が大きい。地形に多少の起伏があったかもしれないが、この差が海堆積に由来するものか、現状では判断がつかない。この点については、今後の課題といえる。

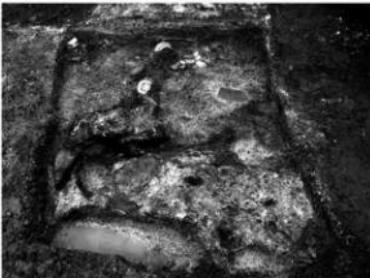


fig.144 杭38 第1・2造構面全景（南から）



fig.145 杭38 第2造構面全景（南から）



fig.146 杭38 SK301・302（南から）

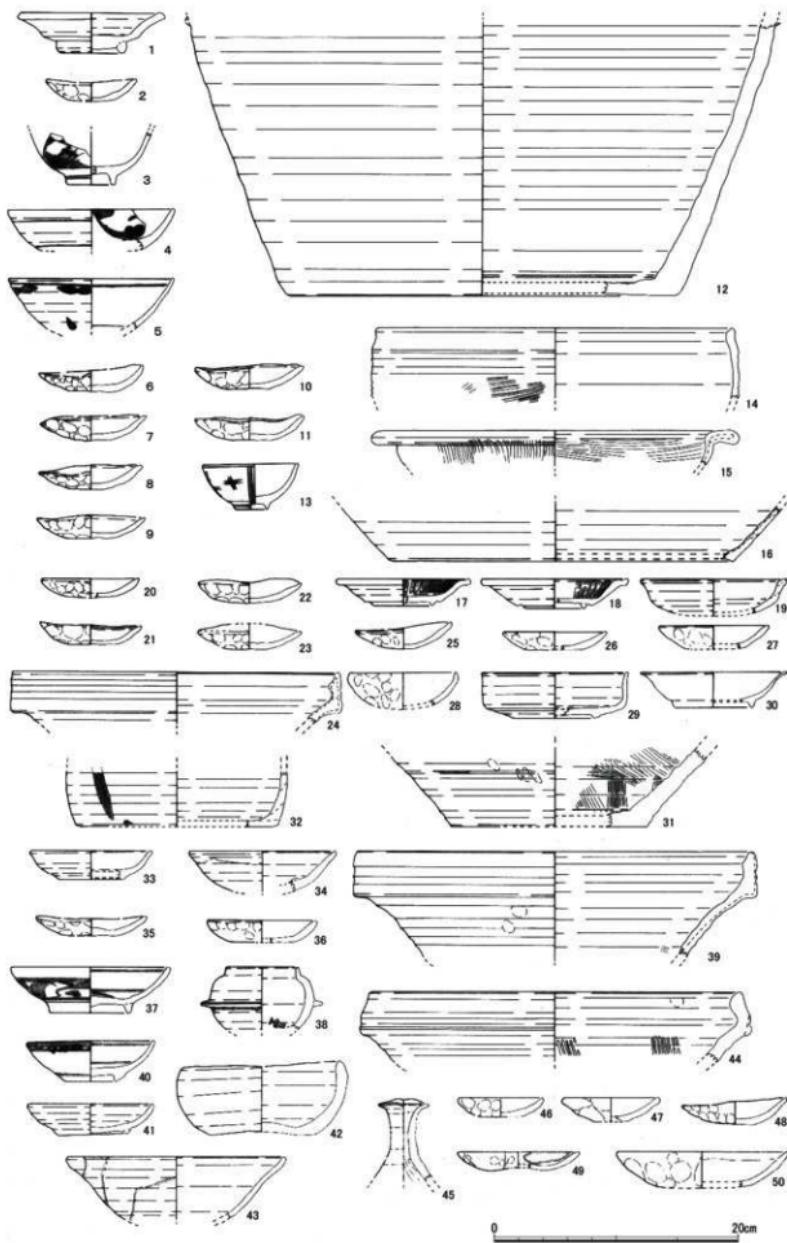


fig.147 出土遺物実測図

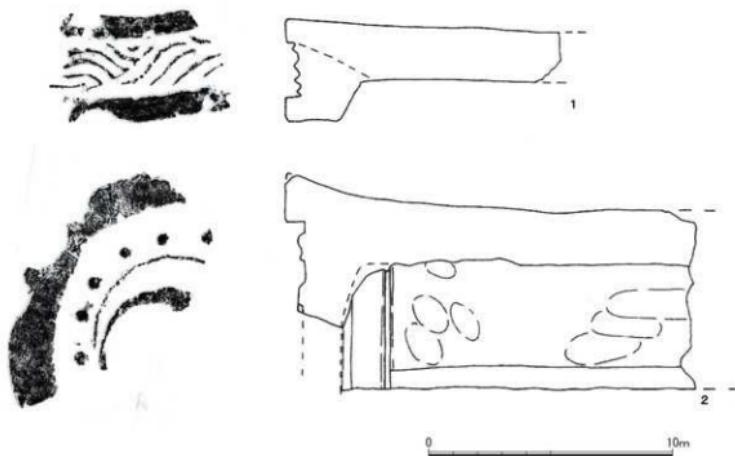


fig.148 出土遺物実測図

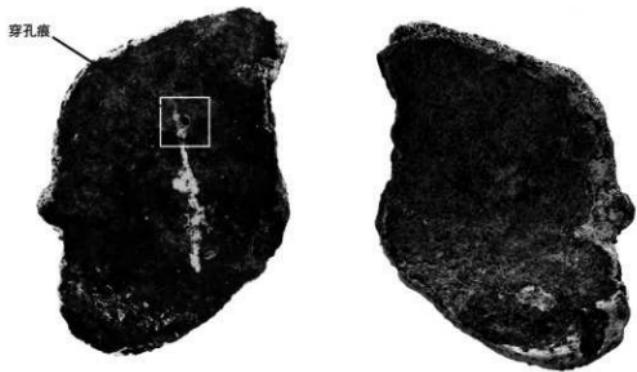


fig.149 杭27 SK302 出土人骨（頭蓋骨・表）

fig.150 杭27 SK302 出土人骨（頭蓋骨・裏）

fig.147

1～2・杭5（1：龍泉窯産棱花皿、2：土師器皿）、3～4・杭7（磁器碗）、5～11・杭9（5：瀘州窯産青花皿、6～11：土師器皿）、12・杭14（備前窯水屋甕）、13・杭16（磁器猪口）、14・杭25（焰焰）、15～19・杭26（15：瓦質鍋、16：朝鮮王朝壺）、17・18・漏戸・美濃窯産菊皿、19：灯明皿）、20～24・杭27（20～23：土師器皿、24：備前窯産擂鉢）、25～31・杭28（25～27：土師器皿、28：灯明皿、29：瀬戸窯産黄釉皿、30：景德鎮窯産白磁端反皿、31：備前窯産擂鉢）、32～35・杭31（32：朝鮮王朝壺、33：瀬戸・美濃窯産丸皿、34：唐津窯産皿、35：土師器皿）、36～39・杭37（36：土師器皿、37：漳州窯産青花皿、38：小形瓦質羽釜、39：備前窯産擂鉢）、40～50・杭38（40：瀘州窯産青花丸皿、41：瀬戸・美濃窯産丸皿、42：備前窯産鉢、43：朝鮮王朝？磁器塊、44：備前窯産擂鉢、45：備前窯産德利、46：土師器皿、47～50：灯明皿）

fig.148

1・杭17（水波軒平瓦）、2・杭38（三つ巴文軒丸瓦）

### 13. 兵庫津遺跡 第65次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、風化の進んだ花崗岩により、崩落しやすい六甲山地から流出した土砂と海流によって大阪湾岸に発達した、湊岬と和田岬のふたつの砂嘴に挟まれた湾の臨海部に立地する、奈良時代～近世にかけての遺跡である。これまでに60回を超える発掘調査が実施されている。「兵庫津」は、古くは「大輪田泊」と呼ばれ、瀬戸内海航路の基幹港のひとつとして発展してきた。文献上の記録では、平安時代後期の『行基年譜』(安元元年〔1175〕成立)に天平13(741)年の記事として「大輪田船島」の記載が知られていたが、平成13年度に兵庫区芦原通で実施された第32次調査で、初めて奈良時代の遺構と遺物が検出され、兵庫津遺跡が奈良時代まで遡る事が確認された。

「大輪田泊」は平安時代末の平清盛による大修築を経て、日宋貿易の窓口として繁栄する。中世には、「兵庫（兵庫島）」と呼ばれるようになるが、室町時代の応仁・文明の乱（1467～1477年）により衰退し、国際港としての地位は堺に譲ることになったとされる。

中世末、安土桃山時代に織田信長による花隈城攻めに戦功のあった池田恒興・輝政父子により、兵庫の町の中心に兵庫城が築かれた。この際に町の周囲には「都賀之堤」を築き、城塞化された。平成 24 ~ 26 年度に、中央市場移転に伴い実施された発掘調査では、兵庫城の石垣・堀が確認された。現状では地上に遺構が残されていないことから、「幻の城」とも言われた兵庫城跡の遺構確認は、大きな注目を集めた。



fig. 151 調査地位置図 1:2,500

元和元年（1615）5月大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡後、「兵庫津」は江戸幕府領となる。西国街道は兵庫へと迂回するようになり、江戸時代初期には幕府の宿駅指定を受ける。その後「兵庫津」は尼崎藩領を経て、明和6年（1769）に再び幕府領となる。兵庫城は「兵庫勤番所」（尼崎藩領期は「兵庫陣屋」）と呼ばれるようになった。18世紀以降には、人口2万人を超える都市であり、幕末には、国内の他の重要港と共に兵庫（神戸）開港が行なわれた。明治時代に入ると兵庫勤番所（兵庫城跡）に初代の兵庫県庁が置かれた。

## 2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建築に伴うものである。調査地は、東側が旧西国街道に面し、兵庫の町への北の出入口である「湊口惣門」の南西側に近接して位置している。

調査は残土置場の確保の関係上、2分割の反転調査を実施した。調査区は西半部を1区、東半部を2区とした。

### 基本土層

基本土層は、現地表下から約0.5～1m前後の盛土層下に、第1遺構面が検出されるが、從前建物基礎などの擾乱の影響を大きく受けしており、第1遺構面は2区において、島状に遺存したのみであった。この状況は、第2・3遺構面も同様であり、2区では、第4遺構面で削平を免れた、深度の深い第3遺構面の遺構が検出される状況であった。基本的に整地後に、三和土状に貼り土をした生活面が形成され、再び盛土による整地を行なうことが繰り返されており、第4遺構面以下は調査区全体での遺構面の遺存が確認された。なお、第6遺構面はT.P.0.5m前後での検出であり、これより下層は激しい湧水により、遺構・遺物の確認を行うことは不可能であった。

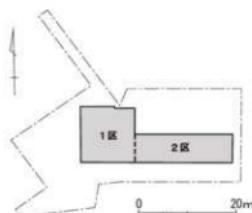


fig.152 調査区配置図

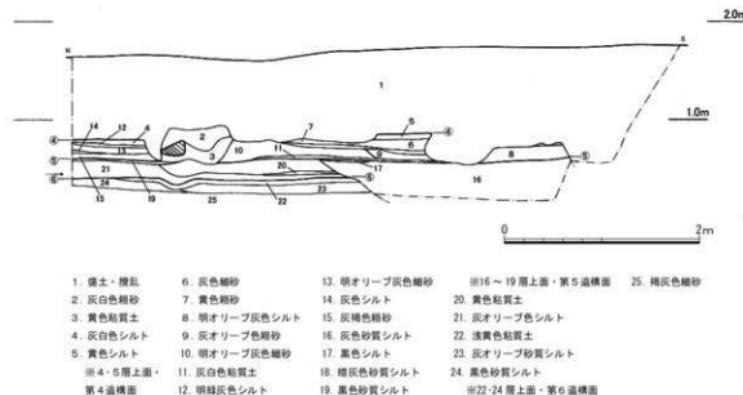


fig.153 2区土層断面図

## 第1遺構面

後世の擾乱の影響を大きく受けしており、1区中央部と2区でわずかに島状に遺存する。

**石列** 1区で北東～南西方向の石列を検出した。主軸はN-15°-Eである。長辺40～50cm、短辺40cm前後の石材を使用しており、矢穴が確認できるものがあった。この石列に対応する石列等は検出されなかった。

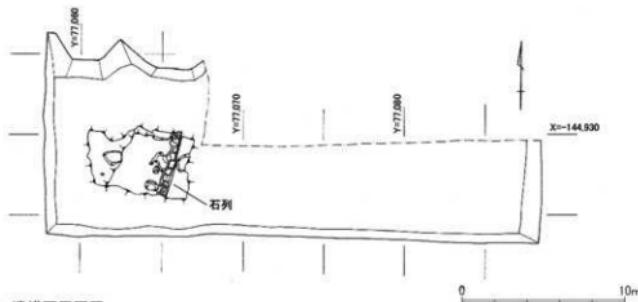


fig.154 第1遺構面平面図



fig.155 1区第1遺構面全景（北東から）



fig.156 1区第1遺構面石列（南から）

## 第2遺構面

**石列** 1区で石列と木列を検出した。北東～南西方向の石列の主軸は第1遺構面で検出された石列と同じ方向であるが、約1.2m南東側に位置しており重複していない。北東～南西方向の石列では長辺50cm前後、短辺30cm前後の石材を使用し、北西～南東方向の石列では長辺40～70cm、短辺35cm前後の比較的大振りな石材を使用している。

また調査区の南側では、北西～南東方向の石列と方向が並行する木列が検出された。木列は擾乱の影響を受けており、検出面の照合には検討を要するが、第2遺構面に伴う可能性が高いものであると考えたい。これら一連の遺構をひとつの区画に伴うものと捉えると、東西幅14m以上、南北幅10mの短冊状の区画が考えられる。区画内からは井戸1基、漆喰遺構1基、内部に平瓦を柱状に組んだ土坑1基、礎石と考えられる石などを検出した。

**井戸SE201** 挖形は長径1.5m、短径85cm前後の卵形で、検出面からの深さ70cmである。内部に径60cmの桶状の木製品を据えており、湧水も著しいことから井戸であると考えられる。陶器・磁器片が出土した。

**漆喰遺構** 長径 1.55m、短径 60cm、検出面からの深さ 25cm の梢円形の掘形内に、約 10cm の厚さに黄色の漆喰状の混和材を塗った遺構で、用途は不明である。内部から土師器、陶器、磁器、瓦片、掘形内から土師器、陶器片が出土した。

この他、調査区西壁付近から落ち込み状遺構 2 基などを検出した。上部は擾乱層の影響を大きく受けているが、検出状況から第 2 遺構面に伴う可能性が考えられる。

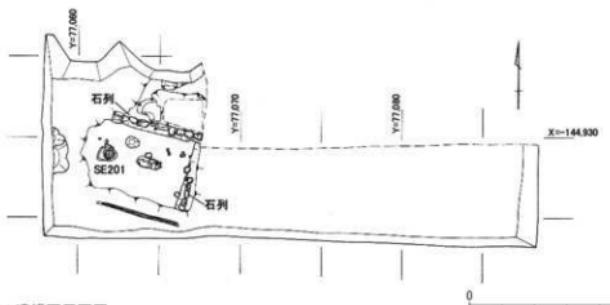


fig.157 第2遺構面平面図



fig.158 1区第2遺構面全景（北東から）



fig.159 1区第2遺構面石列（南東から）

### 第3遺構面

1 区を中心多くの遺構を検出した。但し、2 区では後世の擾乱の影響のため、第 4 遺構面上で深度の深い遺構が遺存する状況で検出された。井戸 3 基、土坑 15 基、溝状の落ち込み遺構 1 基を検出した。

**井戸** いずれも 1 区で検出された。S E302・303 は掘形の長径が 1.5m 以上で、S E302 は検出面からの深さ 60cm。S E303 は掘形内に直径 28cm の曲物状の木製井戸側を設置していたが、湧水が著しく危険なため、完掘することはできなかった。S E304 は径 85cm 前後、検出面からの深さ 44cm、直径 55cm の曲物状の木製井戸側が痕跡となって遺存していた。

**土坑** 1 区を中心に検出されたが、S K302 は掘形内が火を受けており、平瓦などと共に土師器の鉢が出土した。1 区 SK312 は大型の鉢状石製品が出土している。また、SK313 は浅い落ち込み状の土坑で、土師器鉢、陶磁器碗が出土した。2 区 SK314～317 は直径 80cm 前後、検出面からの深さ 50cm の土坑で、貯藏穴などであった可能性が考えられる。

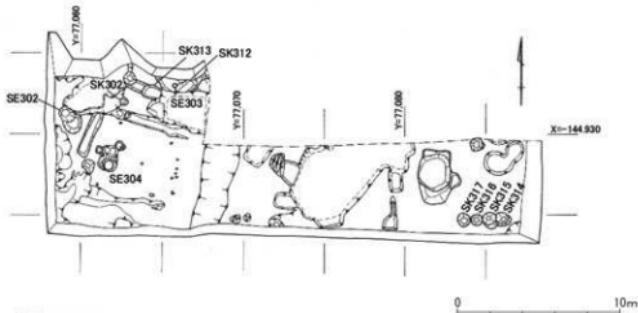


fig.160 第3遺構面平面図



fig.161 1区第3遺構面全景（北東から）



fig.162 2区 SK314～317断面（北西から）



fig.163 SK313 遺物検出状況（南西から）

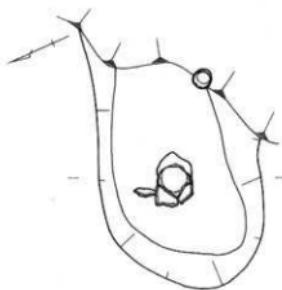


fig.164 SK313 平・断面図

#### 第4遺構面

整地面として検出することができたが、遺構はわずかに1区で礎石状の石を検出したのみである。他に土地区分や建物を示すものは確認することはできなかった。

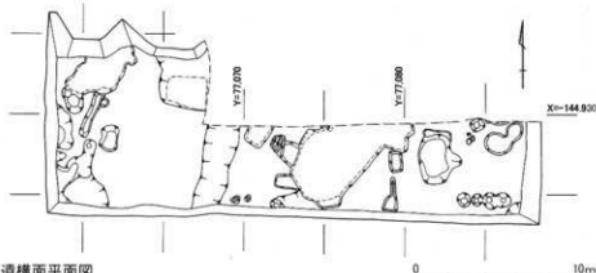


fig.165 第4遺構面平面図

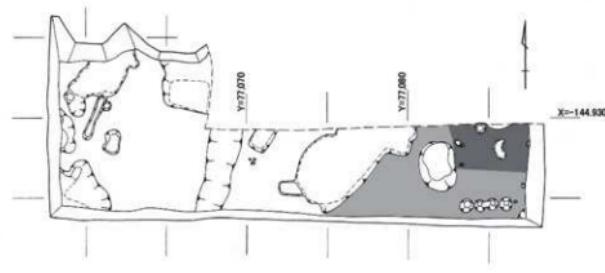


fig.166 第5遺構面平面図

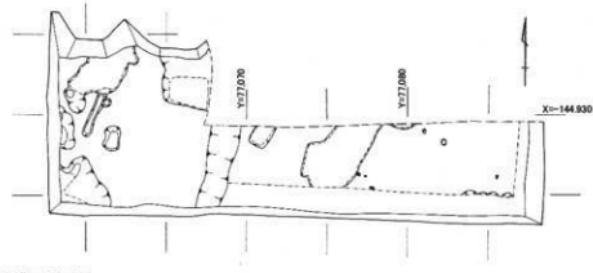


fig.167 第6遺構面平面図

#### 第5遺構面

整地面として検出することができた。1区で顕著な遺構は検出されなかったが、2区東半において、整地面が火を受けている状況が検出された。中央部が大きく攪乱を受けていたが、調査区の北東側でより顕著な焼土面を検出した。東西9m以上、南北6m以上の範囲で、調査区東側の西国街道に直交する短冊状であり、火を受けた礎石状の石が点在することから、建物等の範囲を示すものである可能性がある。

#### 第6遺構面

2区の東半部に三和土状の整地面を検出した。礎石の一部と考えられる石が点在している状況を検出したが、建物としてのまとまりは確認できなかった。湧水点近く、遺構面の各所から湧水が認められた。これより下層は著しい湧水がある。



fig.168 1区第4遺構面全景（北東から）



fig.169 2区第4遺構面全景（南西から）



fig.170 2区第5遺構面全景（南西から）



fig.171 2区第6遺構面全景（南西から）

### 3.まとめ

今回の調査では6面の遺構面を検出した。また、多くの遺物が出土したが、整理作業が完了していないため、詳細な時期の決定及び遺構の性格については、これを待ちたい。ここでは、調査完了時の所見について述べたい。

第1遺構面の石列は、調査地内における土地区画を示唆するものであると考えられる。

第2遺構面は、第1遺構面と同様に後世の擾乱の影響を大きく受けているが、1区中央部と2区東半部で検出することができた。1区第1遺構面の石列と方向、位置に変化が見られるところから、調査地内において、土地区画に変化があったと考えられる。1区の石列は東側の西国街道に直交する主軸に対して9°南へ振っていることから、2区の西国街道に面した区画とは異なった方向の土地区画の存在が窺われる。

第2遺構面については、後世の擾乱の影響と、出土遺物の少なさから時期の決定は困難であるが、磁器の広東碗が出土した遺構が存在することから、第1・2遺構面は18世紀後半～19世紀代である可能性が考えられる。

第3遺構面は、2区では擾乱の影響を大きく受けているが、深度の深い遺構は遺存しており、全体的に多くの遺構を検出した。出土遺物から18世紀半ば～後半の時期が考えられる。第3遺構面以降、1・2区共に多くの遺構が確認されることから、この時期以降に活発な開発の進行が推定される。1区で検出されたS X301は、主軸がN-21°-Eの北東～南西方向であり、土地区画を示すものと考えられる。この方向は第1・2遺構面の1区石列と同じ方向である。

今回の調査では第3遺構面以降にこの区画の存在が確認できることから、18世紀半ば～後半以降に西国街道に面した土地区画の西側で、新たな土地開発が行なわれた可能性も考えられる。

第4遺構面は、整地面として検出できたが、遺構の検出は認められなかった。

第5遺構面は、2区東半で焼土面を確認した。この焼土面が町屋範囲である可能性が高く、特に顕著な焼土範囲は建物の範囲と考えられるが、火災に伴うものであるかは不明である。

第6遺構面は、調査地東半のみで整地面が検出された。軟弱な褐色細砂層上面に三和土状の整地を行なったと推定される。第4遺構面以下は遺物が少なく時期の特定は困難である。

**『兵庫津絵図』との対比** 兵庫津を描いた絵図はいくつか現存するが、最古のものとして尼崎藩領時代の元禄9年（1696）に兵庫奉行が尼崎藩に提出した絵図の控えである、『揖州八部郡福原庄兵庫津図』（以下、『元禄絵図』）がある。『元禄絵図』はこれまでの発掘調査成果により、現在の地図との対比が可能になり、その精度の高さが実証されている。

『元禄絵図』から、調査地を比定すると、元禄期には「湊町」に所在し、東側が北から南へと続き「札場の辻」で西へ向かう西国街道に面する。北東側に兵庫津への北の出入口である「湊口惣門」と「番所」、「高札場」、北西には「湊八幡宮」が近接し、兵庫津の北辺部に位置している。調査地の南西側は「西光寺」の広い境内に接している。

湊口惣門の外側は兵庫津外であり、惣門から東には「佐比江・川崎船入江」と呼ばれる入江が広がり、また同じく西側には「都賀之堤」とその外側に濠が巡っている状況が確認できる。また、惣門の北側で「都賀之堤」外側の濠と、西から流れる河川が合流して、佐比江へと注ぐ、兵庫津北側の防御の要の地点である。『元禄絵図』では、西国街道沿に町屋が描かれ、西側は「内烟」と記されている。

**町場の拡大と変化** 『元禄絵図』以後、『揖津国矢田郡福原庄兵庫地図』（宝曆元年〔1751〕・以下『宝曆絵図』）、『兵庫津絵図』（明和6年〔1769〕・以下『明和絵図』）、『津中絵図控』（嘉永3年〔1850〕）などの、兵庫津を詳細に描いた絵図が存在するが、次第に町場が拡大し、新たな道が作られるなどの変化が確認できる。

『宝曆絵図』では、「湊町」と南側の「江川町」との境に西側に向かう道が新設され、『明和絵図』では「湊町」の西半西側の「内烟」の南半も町屋へと変わっており、調査地南西部はこの新たな道に接していた可能性がある。この道の方向は、今回1区の第1～3遺構面で検出された区画の方向とはほぼ同じであり、第3遺構面の時期が18世紀半ば～後半と推定されることも絵図の時期と一致する。第3遺構面以降、1区において、新たな区画の方向が確認される様になることも、兵庫津におけるこの時期の町場の拡大に関連するものである可能性がある。

**調査地の性格** 調査地は、兵庫津を通過するメインロードである西国街道の西側に面し、町の北側の出入口である「湊口惣門」の南西側に近接するなど、兵庫津内における中心地に所在する。しかし、西国街道に面すると推定される2区では遺構・遺物共に、多くではなく、礎石や石列などの土地区画を示す遺構も希薄である点は、様々な疑問を呈する。大きな区画での施設の存在などの可能性も考えられるが、この点については、出土遺物の整理作業の完了を待って、近隣地の調査データや絵図を基にした、詳細な検討を行ないたい。

## 14. 兵庫津遺跡 第66次調査

### 1. はじめに

兵庫津遺跡は、湊岬と和田岬のふたつの砂嘴に挟まれた湾の臨海部に立地する、奈良時代～近世にかけての遺跡である。これまでに60回を超える発掘調査が実施されている。



fig.172 調査位置図 1:2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査は、範囲確認調査に伴うものである。調査地は、東側が旧西国街道に面し、兵庫の町への北の出入口である「湊口惣門」の南西側に近接して位置している。

設定した調査区南側に、従前建物の基礎の間に遺構面の遺存が確認されたため、この範囲について調査区を拡張して発掘調査を実施した。

#### 基本層序

基本土層は、盛土下30～60cmで第1遺構面となる。シルト系の土層を挟んで、標高約1mで黄色系の細砂～シルトをベースとする第2遺構面となる。第3遺構面以下は、攪乱の影響を受けながらも調査区全体で検出することができた。基本的に整地後に、三和土状に貼り土をした生活面が形成され、再び盛土による整地を行なうことが繰り返されている。なお、第6遺構面は T.P. 0.5m前後の検出であり、これより下層は激しい湧水により、遺構・遺物の確認是不可能であった。

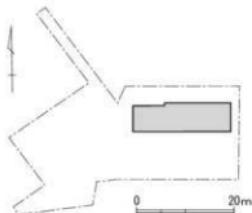


fig.173 調査区配置図

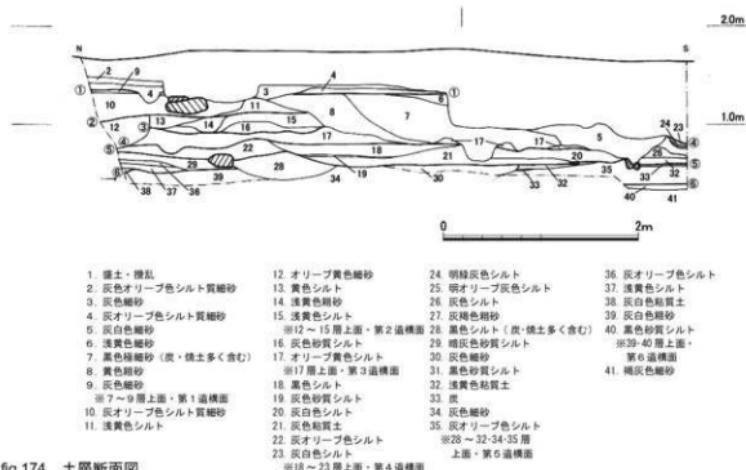


fig.174 土層断面図

### 第1遺構面

調査区北東側、東壁付近にわずかに三和土状の整地面を確認したのみである。

### 第2遺構面

調査区北東側でほぼ東西方向の石列を検出した。

**石列** 主軸を3°南へ振る。石材の並べ方には差異が認められ、長辺25～50cm前後、短辺20～30cm前後の石材を使用して、東西方向に一列の石列を設けた後に、その南側に拳大や長辺25～35cm前後、短辺25cm前後の大小様々な石材を並べて、さらに石列を設置している。両者に時期差があるのか、同時に設置されたのかは不明である。西国街道に直交する方向と考えられ、街道に面した土地区画の石列である可能性がある。

### 第3遺構面

多くの遺構を検出した。ただし、拡張区では後世の擾乱の影響のため、第4遺構面上で深度の深い遺構が遺存する状況で検出された。井戸2基、土坑20基以上、溝、落ち込み遺構、石列などを検出した。

**井戸** いずれも調査区西半で検出された。S E304は掘形の直径は1.5m前後で、検出面からの深さは1.0m以上で、湧水が著しく危険なため完掘することはできなかった。掘形内に直径65cmの井戸側を設けており、幅10～15cm幅の板材5点が縦方向で円形に据えられた状況で確認されたため、縦板の井戸側と考えられる。

S E305は掘形の長径2.3m、短径1.6mで、検出面から深さ85cm前後から直径70cmにすぼむ。深さは1.2m以上で、湧水が著しく危険なため完掘することはできなかった。井戸側は確認されなかつた。

**土坑** 大小様々な規模のものが検出された。S K302は直径80cm、検出面からの深さ80cmで土師器砲烙が出土した。S K304は直径2.0m以上、検出面からの深さ80cmで、土師器砲烙、磁器碗、皿、仏飯具が出土した。S K331は直径85cm、検出面からの深さ25cmで磁器碗が出土した。

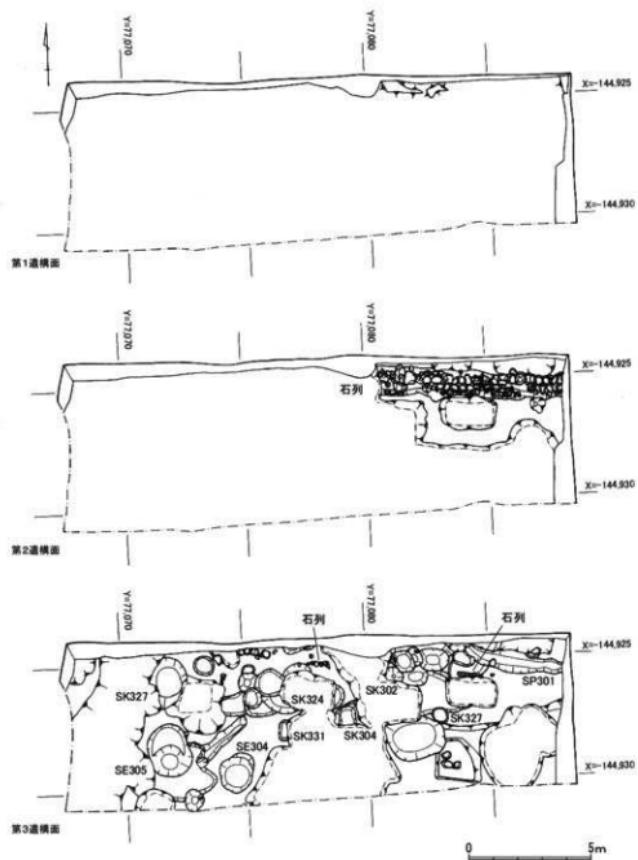


fig.175 第1～3遺構面平面図



fig.176 第1遺構面全景（西から）



fig.177 第2遺構面全景（西から）

これらの出土遺物は18世紀半ば～後半の時期が考えられる。SK321・324・327・329などは直径1.5m以上、検出面からの深さが50cm前後の大型の土坑である。

調査区北東側で検出した溝（SD301）や調査区北側で検出した石列は、いずれも第2遺構面で検出した石列と位置・方向がほぼ同一であり、土地区画を示すものと考えられる。

#### 第4遺構面

調査区の東半で東西方向の溝・石列、礎石状の石を検出した。検出した溝は第2・3遺構面よりもやや主軸を南へ振るが、石列と共にほぼ位置・方向を同一にしており、土地区画を示すものと考えられる。礎石は建物としてのまとまりは確認されなかった。

#### 第5遺構面

整地面として検出することができた。1区で顕著な遺構は検出されなかつたが、調査区東半において、整地面が火を受けている状況が検出された。中央部が大きく攪乱を受けていたため

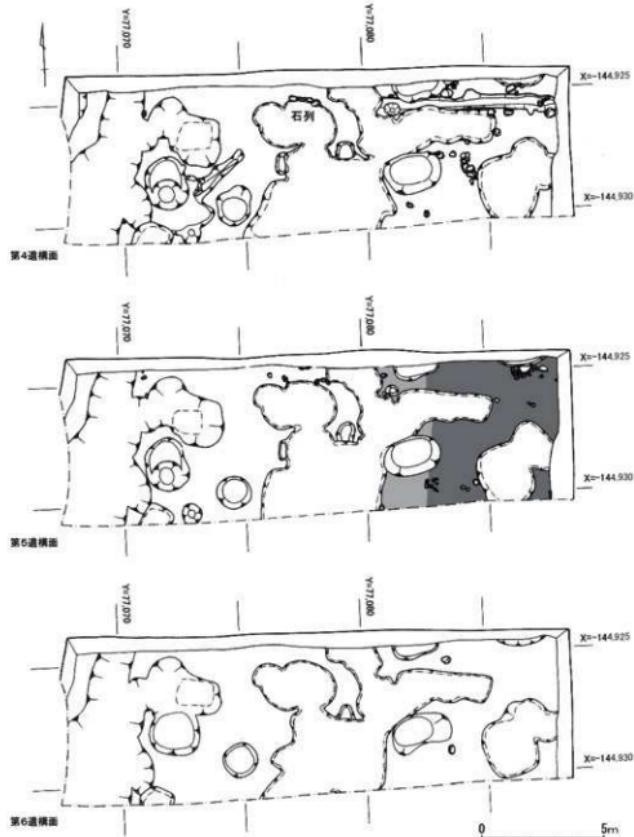


fig.178 第4～6遺構面平面図



fig.179 第3遺構面全景（西から）



fig.180 拡張区第4遺構面全景（西から）



fig.181 第4遺構面全景（西から）



fig.182 第5遺構面全景（西から）



fig.183 拡張区第5遺構面全景（西から）



fig.184 拡張区第6遺構面全景（西から）

全体の範囲については不明であるが、調査区東壁から西へ 5.5m の範囲でより顕著な焼土面を検出した。建物等の範囲を示すものである可能性がある。

#### 第6 遺構面

調査区の東半部に三和土状の整地面を検出した。礎石と考えられる石を検出したが、建物としてのまつりは確認できなかった。湧水点近く、遺構面の各所から湧水が認められた。これより下層は、著しい湧水がある。

#### 3.まとめ

今回の調査では6面の遺構面を検出した。また、多くの遺物が出土したが、整理作業が完了していないため、詳細な時期の決定及び遺構の性格については、これを待ちたい。

第1 遺構面は、後世の擾乱の影響を大きく受けており、調査区の北東側でわずかに島状に遺存する状況であったため、全体の様相は不明であると言わざるを得ない。

第2 遺構面は、第1 遺構面と同様に、後世の擾乱の影響を大きく受けているが、調査区北東部で第2 遺構面を検出することができ、東西方向の石列を検出した。

検出した石列は方向から、調査地東側の旧西国街道に直交するものであり、土地区画の境界などを示すものである可能性が高い。西国街道に直交した短冊地割の存在が考えられる。

第2 遺構面の時期については、後世の擾乱の影響と、出土遺物の少なさから時期の決定は困難であるが、磁器広東碗を含む遺構が存在することから、第1・2 遺構面は 18 世紀後半～19 世紀代である可能性が考えられる。

第3 遺構面は、擾乱の影響を大きく受けているが、全体的に多くの遺構を検出した。第3 遺構面の遺構の時期については、出土遺物から 18 世紀半ば～後半の時期が考えられる。調査区北側で検出した東西方向の溝と石列は、第2 遺構面の石列とほぼ同じ位置・方向であり、土地区画を示すものと考えられる。

第4 遺構面は、調査区東半で、東西方向の溝・石列、礎石と考えられる石の点在を検出した。検出した溝・石列は、第2・3 遺構面よりもやや主軸を南へ振るが、石列と共にほぼ位置・方向が同一であり、土地区画を示すものと考えられる。区画を示す石列・溝の存在は第4 遺構面以降であり、その後連綿と区画が繼續されていたことが推定される。

第5 遺構面は、調査区東半で焼土面を確認した。この焼土面が町屋の範囲である可能性が高く、特に顕著な焼土範囲は建物の範囲である可能性も考えられるが、火災に伴うものであるかは不明である。第5 遺構面では、第4 遺構面以降で確認された石列・溝などは検出されなかつたが、焼土の検出状況から西国街道に直交する土地区画の存在が推定される。

第6 遺構面は、調査地東半のみで整地面が検出された。軟弱な褐色灰色細砂層上面に三和土状の整地を行なったと推定される。第4 遺構面以下は遺物が少なく時期の特定は困難である。

今回の調査では、6面の遺構面を検出し、調査地の東側に南北に通過する西国街道に対して、直交する土地区画に伴うものと考えられる石列・溝を検出した。

西国街道に対して直交する土地区画は、第3 遺構面の段階には確認することができ、石列や溝の存在から第4 遺構面以降、連綿とその区画が引き継がれている状況が確認された。

また、第3 遺構面では多くの遺構・遺物を検出した。西国街道の西側に面した、調査地は、町屋の並ぶ一角に位置するものと推定される。

また、遺構埋土中からであるが、中世後半の須恵器片や古墳時代後期頃の須恵器灰蓋片なども出土しており、近隣に当該期の遺構・遺物の存在も示唆される。